「語れる恵み」

日田福音キリスト教会　竹崎　光則



聖書は、すべて神の霊感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。　Ⅱテモテ3・16

人は病気になって、ようやく健康のありがたみを感じ、大切なものを失って、はじめて与えられていた恵みに気がつきます。CS教師として33年間、子どもたちに御言を語り続けてきました。主の思いを込めて語ってきたつもりではあります。しかし、礼拝説教も含め、御言を語ることが当たり前になっているゆえに、御言を語れるということがどれほど恵みであるかに気づいていませんでした。それを気づかせてくれたのは、昨年12月友人の子どもが通う仙台の小学校での事です。読み聞かせの担当になっていた友人の代役として、10月に行ったネパールの話しをしました。いじめの苗床「スクールカースト」の本家本元カースト制度について淡々と語り、そこから子どもたちに考えてほしいと思っていました。しかし、熱を帯びてしまいつい「これは間違っている！　人が人を差別し、虐げることはあってはならない！」と言ってしまったのです。『なぜなら、神様が世界を造られた…』言えない！　公立校で神様は出せない。無い知恵と知識を総動員、はじき出した言葉は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を作らず。福沢諭吉の有名な言葉です」。フーっ。とりあえず児童、友人、教師、三方丸く収まりました。いえ喜んでくれました。しかし、私の中にはモヤモヤが。そして気づいたのです。人生のすべての課題には「キリスト」が必要である事、「神」ぬきで世界の問題は解けない事を。そして神の言を語れるのは、何とすばらしいことかと。私たちは人を救い、生かす聖書（御言）を語ることができるのです。

あなたは、順番だから子どもたちに説教をしていますか。担当だから分級で子どもたちに向かい合っていますか。私たちは子どもたちの人生の疑問や苦しみへの答えとして、大胆に御言を示し、励ましてあげることができます。子どもたちは教会学校でしか、真理を知ることはできないのです。語れる恵みに押し出され、大胆に御言を語っていきましょう。

牧羊者

目次

巻頭言 …… 1
目次 …… 2
サムエルと王たち ≪7／1～7／15≫ …… 3
救い ≪7／22～8／5≫ …… 21
キリストと出会った人々 ≪8／12～9／16≫ …… 39
詩歌① ≪9／23～9／30≫ …… 75
牧羊ひろば（但馬福音教会） …… 87
カリキュラム …… 93
「牧羊者」のご購読・ご利用について …… 94
おわりに …… 94

〔凡例〕

1．原語について…ギリシャ語は㋗、ヘブル語は㋭、アラム語は㋐で表記しています。

2．礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ…「教会学校・日曜学校　子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン…「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ…「ふくいん子どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2　グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW…「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

聖　書　列王上12・1〜19
テーマ　レハベアムとヤラベアム

（石田高保）

序論

神の祝福を受けて栄華を極めたダビデ・ソロモン王国が、三代目のレハベアムによって早くも分裂するとは、当時の誰も予測しなかったことでしょう。なぜ神はご自身の王国が諸外国の物笑いになるようなことを許されたのかと民はいぶかしく思ったに違いありません。けれども分裂を招いたのは神様ではなく、実はソロモンでした。彼は前半生においては忠実な主のしもべでしたが、後半生においては妃たちの持ち込んだ偶像にこころ傾け、それを神様から二度もたしなめられたにもかかわらず、悔い改めようとはしませんでした。それに対する報いは彼の子どもの代に国を二つに分けてしまうというものでした（11・11〜12）。

一、王国分裂の原因

こうして統一イスラエルは失われ、北のイスラエル王国と南のユダ王国と、以後5世紀にわたる南北朝時代が始まるのです。両国が骨肉の争いを繰り返し、ついにはどちらも亡国の憂き目にあいます。これは決して神のご計画ではなく、王たちをはじめ人間たちの過ちが積み重なって招いた事態です。神ご自身がどれほど心を痛められたことでしょうか。神は罪を完全に赦しますが、罪によって生じる結果は人間に負わせます。それは罰ではなく、自立し成長させるためです。三国志の諸葛孔明は右腕と頼んでいた部下が命令に背いて大敗した時、軍の規律を保つため「泣いて馬謖を斬」りましたが、類推の助けになるかもしれません。神様は罪のゆえに王国が分裂するのを涙を呑んで許されたと言えるでしょう。

こうして神の計画はとん挫したように見えますが、歴史の大きな流れは神がコントロールしておられ、たとえ灯心が消えかけても、次の灯心へと火を継いで行かれ、神の遠大な計画がくじけることはありませんでした。アッスリヤによる捕囚によって、イスラエル王国の十部族は離散してまとまりを失いますが、ユダ王国の二部族、特にユダ族は国が滅んでもバビロン捕囚を耐えて結束を保ちます。その中でもダビデ王の直系は連綿と保たれ、われらの主イエス・キリストに至るわけです。

二、王国分裂の教訓

ソロモン王の晩年になると治世への不満が国の内外に噴

出し、有能な官僚のヤラベアムもひそかに謀反を企てます。それは預言者アヒヤからイスラエルの十部族を与えられると約束されたからです（11・31）。これに背中を押されて十部族の長老と共にレハベアム王に土木事業の労役を軽くして欲しいと陳情します。王がソロモン時代の重臣たちに相談すると、民のしもべとなって要求どおり軽くしてあげるなら、彼らは末永くしもべとなってくれると答えます。ところが王はこれに満足せず、自分と一緒に育った若い家臣たちに相談すると、軽くしてあげるどころかもっと重くすべきという答えが返ってきます。王は重臣たちの忠告を退け、若い家臣たちの意見を採用しました。すると十部族の長老たちは猛反発し、王国から分離してヤラベアムを王に立て、独立することで結束します。レハベアムはまさかこれほどあっけなく十部族が離反するとは思ってもみなかったでしょう。そこであわてて国を取り戻そうと民に動員をかけますが、預言者の言葉に従って諦めます（21～24）。彼が荒々しく答えたのも、〈主が仕向けられた事〉と書かれているように、重税にあえぐ民の苦しみを理解しようとしない鈍感さと高慢に根があったのではないでしょうか。

ここで先代の重臣たちが王はしもべとなって民に仕えれば、民はしもべとなって王に仕えると言っているところに注目しましょう。これは彼らがダビデやソロモンに仕える中で悟った帝王学でした。王はその地位のゆえに王たるのではなく、王として民に仕えてこそ王たりえるという政治哲学です。つまり王位を継いだ者は民に対して真摯に責任を負い、彼らとの信頼関係を積み重ねてこそ王としての権威と尊敬を獲得することができるというものです。事実、神を冒涜（ぼうとく）したり、国策を誤って民に甚大な被害をもたらしたりした王は、監禁させられたり、王の墓に葬られなかったり、はなはだしい場合は重臣たちに暗殺されたりしています。

結論

イエス様は「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならなければならない」（マタイ20・27）と言われますが、私たちも身近な誰かを育てるために自分の時間やエネルギーを与えてゆく生き方を選んでゆきたいと思います。そのように関わってゆくとき、その人が成長し、自分も成長します。これはキリストのかたちへと近づくための王道ではないでしょうか。

研究資料

（金井由嗣）

イスラエルの王権思想

古代オリエント世界では、一般に王は絶対権力を持つ独裁者であった。しかしイスラエルにおいては、主なる神が王であるとの思想のもとで、王権は神との契約によって制限され、神への信仰に忠実な王が理想とされた。

サムエル記はそのような王権思想のもとに書かれており、列王記もその思想を踏襲している（ボールドウィン）。無制限な王権を良しとしない思想はまた、神が顧みておられる「弱い者、貧しい者」を保護することを王に要求する根拠ともなる（ブルッゲマン）。

ダビデはこの面で理想的な王であったが、ソロモンの宮廷の持つ国際的な性格、とりわけ異国出身の妻たちによって偶像礼拝とともに入り込んだオリエント的王権思想は王権の拡大を招き、過重な労役に対する不満が王と民の関係を悪化させていた。同様の問題はこの後もイスラエルの歴史の中で繰り返される（例えば列王上21章）。

テキスト

1　レハベアムはシケムへ行った　ソロモンの死によって王位を受け継いだレハベアムだが、十二部族すべての承認を得るために長老たちの集会に出る必要があった。部族連合体に推されて王位に就くというダビデ以来の伝統（サムエル下5・3）がまだ生きていた。ソロモンの晩年に北方十部族との関係が悪化していた（11・26以下）ことも背景にあったと考えて良い。**彼を王にしようと**十部族の長老たちは、レハベアムを王とすることに同意していたが、無条件ではなかった。

3　人々は…彼を招いた　ソロモンに追放されたヤラベアムを交渉の代表とすること自体が、十部族の交渉が友好的なものではなかったことを示している。

4　今父上のきびしい使役と…重いくびきとを軽くしてください。そうすればわれわれはあなたに仕えます　ソロモンの晩年には、税・労役・軍役が民の重い負担となっていた。その軽減がレハベアムの王位を承認するための条件であり、民の代表としては当然の要求であった。

6　ソロモンに仕えた老人たち　新改訳、新共同訳は「長老たち」。十分な経験を積み、民の苦しみも理解している大人たちの助言は適切だった。

8　自分と一緒に大きくなって自分に仕えている若者た

ち　レハベアムは即位した時すでに41歳であり(14・21)、成人としての自負もあって長老たちの助言を聞き入れなかった。彼は物心ついた時から王子として育っていて、民の労苦に共感することができなかったと思われる。彼は自分と同世代の、王権についての思想と感覚を共有する家臣たちの不適切な助言を採用した。

9　われわれはなんと返答すれば　レハベアムの家臣への二つの問いかけ（これと、6節の「この民にどう返答すれば」）は、微妙にニュアンスが異なっていた。6節では「どのように（how）」との疑問詞と不定法で一般的な答え方について尋ねているが、9節では疑問詞「何を（what）」と一人称複数の動詞で「われわれはなんと返答すればよいか」と、若い家臣たちとの一体感を示す尋ね方になっており、また彼らに尋ねる前にすでにレハベアムの方針は決まっていたことが分かる。

10　わたしの小指は父の腰よりも太い　ソロモン以上に強大な王権の主張と、より重い労役の要求であった。王権は強大で独裁的であるべきとの古代オリエント的王権思想が見て取れる。それはイスラエルの伝統とは明らかに相反する思想だった。若きソロモンが即位した時の謙遜と神への恐れ（3・4～16）は、レハベアムには見られなかった。

15　これはかつて主が…　レハベアムの愚かな答えは彼自身の性格と思想から出たものだが、同時にそのような愚かさも神の計画の中で起きたことを聖書は教えている。根本的にはソロモンの晩年の偶像礼拝がこの事態を招いたのであった。

16　イスラエルよ、あなたがたの天幕に帰れ　本日の個所では、「帰る」（へ）シューブ）という動詞が繰り返し用いられ、キーワードとなっている。ヤラベアムはエジプトから帰って王位に就き(20)、レハベアムは全イスラエルの王となることに失敗してエルサレムに逃げ帰った(18)。それは民の要求に対して王が「返した」言葉に対する民の「返答」であった。神の計画の中であっても、人は自分の行為の結果を引き受けなければならない。

参考図書　ワイズマン（ティンデル）、ネルソン（現代聖書注解）、舟喜信（新聖書講解シリーズ）、油井義昭「王」（「聖書神学事典」）、ボールドウィン『サムエル記』（ティンデル）、ブルッゲマン『サムエル記』上・下（現代聖書注解）

1日　礼拝メッセージ例

聖　書　列王上12・1〜19
タイトル　レハベアムとヤラベアム
暗唱聖句　怒りをおそくする者は大いなる悟りがあり、気の短い者は愚かさをあらわす。箴言14・29
目　標　思いやりのある優しい言葉を使う者となる。

導入

（土屋開夫）

皆さんが行っている幼稚園や小学校の先生は、優しいですか、それとも怖いですか？

先生が子どもの頃、保育園の担任の先生はとても優しい先生でした。その「めぐみ先生（仮名）」が私も大好きで、毎日楽しく保育園に行っていました。ところがある時、めぐみ先生が風邪でお休みになり、しばらくの間、代わりに怖くて厳しい「鬼子（おにこ）先生（仮名）」が担任になりました。鬼子先生は言いました、「言っておくけど、私はめぐみ先生みたいに甘くないよ」。次の日、私は「ヤダー、行きたくないー」と泣き叫びました。

皆さん、どうですか？　誰だって、怖い人より優しい人の方がいいよね。怖い人からは離れたくなります。逆に優しい人には近づきたくなります。今日、登場するレハベアム王様はどっちだったのでしょう？

国民の求め、願い

レハベアム王様は、お父さんのソロモン王様の後を継いでイスラエルの王様になりました。さあ、これからどのように国の人々を治めればいいのでしょう？

ソロモン王様の時、人々はたくさんの税金を納めなければならなかったり、辛い労働をさせられて、苦しんでいました。ある時、人々はレハベアム王様の元にやってきて、このように言いました、「あなたの父上であるソロモン王様は、私たちに重たい重荷を負わせられました。でも息子であるあなたが、その重荷を軽くしてくださるなら、私たちはあなたに仕えます」と。つまりソロモン王様は厳しかったけれども、あなたは優しくして下さい、と願ったのです。

二つの語りかけ

レハベアム王様は、どうしたものかと、まず、長年ソ

ロモン王様に仕えてきた僕たちに相談しました。すると彼らはこう言いました、「もしあなたが…ねんごろに（新改訳「親切なことばを」）語られるならば、彼らは永久にあなたのしもべとなるでしょう」。彼らはソロモン王様の元で国民が苦しむのを見てきたのでしょう。「このままでは国民の心が離れてしまう」と。

レハベアム王様は、自分の子分のような若い僕たちにも相談しました。彼らは国民に「こう言いなさい」と勧めました、「わたしはさらに、あなたのくびきを重くしよう…」と。

皆さんの心にも、神様の語りかけと悪魔の語りかけの両方を感じる事はありませんか？　その時、大事なのは、心を静かにしてお祈りをし、神様に聞くことです、「神様、私はどうすればいいでしょうか？」と。

もし、神様に祈らないで、「なんかムカつく！」と怒りの気持ちで行動するならば、それは愚かな事です。

残念ながら、レハベアム王様は愚かな方を選んでしまいました。人々の重荷を軽くし、優しい王様になるよりも、人々を更に苦しめ、威張り散らす王様になる事を選んだのです。

その結果、人々は怒り、多くの国民がレハベアム王様から離れていきました。そして残念な事に、今まで一つだったイスラエルの国は、北（10部族）と南（2部族）に分かれてしまったのです。

恵み深いイエス様のように

自分に当てはめて考えてみましょう。皆さんは自分より年下の子に、偉そうに威張る事はありませんか？　幼稚園なら年少さんに、小学校なら1年生や2年生に。あるいは弟や妹に。（先生も、家族に優しくしているだろうかと反省させられます。）

大事な事は、いつもイエス様をお手本にする事です。イエス様は王の王、最高の王様ですが、子どもにも、女の人にも、病気の人にも、罪のある人にも優しく接し、「めぐみにめぐみを加えられ」（ヨハネ1・16）ました。

私たちもイエス様の恵みと優しさをいただいて、周りの人に接しましょう！

♪愛をください♪（イン67）

聖　書　歴代下32・9～22
テーマ　ヒゼキヤ

（石田高保）

序論

ヒゼキヤ王の時代にふりかかったアッスリヤによる侵略に対して、神様がどのように介入して下さったかを調べて、現代にも働いている神様のみわざを体験したいと思います。

一、神への信頼から出る勇気

「ヒゼキヤがこれらのことを忠実に行った後」（32・1）、ヒゼキヤ王は先王が国じゅうにまん延させた偶像礼拝を神への熱心に燃えて一掃しました。宗教改革を立派に成し遂げたわけです。こうして国内が治まったと思ったら、今度は外患に悩まされることになります。北方の強国アッスリヤが大軍を率いてユダ王国を侵略し、エルサレムに迫ってきたのです。これを知ったヒゼキヤは、城壁を二重にして防御を固め、城外の水源をふさいで敵が水を得られないようにしました。彼我の兵力に大差のあることを考えれば、戦わずして降伏し、屈辱であっても和睦するほうが現実的です。しかしヒゼキヤは圧倒的な敵に対して決戦する道を選びました。彼が蛮勇の人だったからでしょうか。そうではありません。万軍の主なる神様に信頼していたからです。そのことは民に対する彼の演説からうかがえます。「われわれと共におる者はわれわれの神、主であって、われわれを助け、われわれに代って戦われる」（8）。これを聞いた民は安心し、どれほど王を頼もしく思ったことでしょう。ヒゼキヤは崖っぷちに追いやられながらも恐れと向き合い、主により頼むことによって踏みとどまっています。これは並外れて勇気のある行為です。大軍の前に恐れおののく民を落ち着かせ、人心を一つにまとめました。この奇跡的な勇気とリーダーシップはどこから来るのでしょうか。言うまでもなく彼のより頼んでいる神ご自身からです。ヒゼキヤは目に見えないお方を目に見えるように見る力を授かり、現実を超越して神の勝利を信じました。

ほどなくアッスリヤの将軍ラブシャケがエルサレムにやってきて、無駄な抵抗はやめて降伏せよとユダヤの言葉で脅しをかけてきます。しかもわれわれの神はお前たちの神よりはるかに強いのだから、早く諦めよというわけです。この当時、外国に負けるのはその国の神が弱かったからだと考えられていました。彼は知らないで天の神を敵に回し

たわけです。

二、想像をこえる祈りの答え

絶体絶命の中で王は預言者イザヤと共に祈ります。するとその日の夜、主の使が現れてアッスリヤの将兵18万5千人を撃ち殺し、一人も生き残りませんでした。詳細は列王下19章に記されていますが、ここではたった二節で簡潔に彼らの祈りとその答えが記されています（20、21）。自軍の全滅を目の当たりにしたアッスリヤ王は面目を失い、失意のうちに都へ戻ると、今度は息子からあっけなく殺されてしまいます（列王下19・37）。いっぽうヒゼキヤ王は鮮やかな主のみわざに驚嘆し、夢を見ているような心持だったでしょう。祈りと願いをはるかにまさる形で神様が解決して下さったのです。

よくよく考えてみると、私たちの祈りというものが予想どおりにかなったことは一度たりともなかったのではないでしょうか。いつでも私たちの想像を超える形で実現されてきたはずです。「わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」（イザヤ55・9）とあるように、広大無辺な神の世界を覗く人間の霊の窓はきわめて小さいために、そのほんの一部分しか見ることができません。つまり予想できる範囲も狭く、選択肢もわずかしか思い浮かべることができないのです。ところが神様のほうは、全知ですから人間とは比べようもなく圧倒的に広い世界を見ておられ、選択肢も無数にお持ちです。その中から私たちのために最善の道を選択し、最善の状況に整え、最善のタイミングで祈りの答えをお与えになります。ですから祈りのこたえられ方は、例外なく私たちの想像を超えているのです。裏をかいているのではありません。

結論

そういうわけですから、私たちが何かの課題について祈りるとき、神様が私たちの想定を超える形で答えて下さると期待してよいわけです。しかも神様は無限の愛にあふれる父親として私たちに接してくださいます。目に入れても痛くない子どもである私たちのためには、何でもかなえてあげたいと思っておられます。もちろん私たちの願うとおり、すぐにかなうわけではありませんが、神の親心は出し惜しみすることなく、もったいぶることなく、恩着せがましくもなく、気の遠くなるほど気前の良いものです。期待して祈ってゆきましょう。

研究資料

（小平徳行）

アッスリヤの侵入（BC701年）はユダ王国にとってバビロン捕囚以前の最大の脅威であった。これに対しヒゼキヤは、給水施設を保護し、城壁を築き直し、防備を整え、神を信じるように励ました（3～8）。列王下の並行個所では、ヒゼキヤはエルサレム陥落を恐れ、神殿の財宝でアッスリヤと融和しようとした弱気な面も記している（列王下18・13～16）。この出来事は、ヒゼキヤの徹底した宗教改革（29～31章）の後に起こった。神に忠実に従おうとする時、信仰の試みを受けることがある。

テキスト

9　アッスリヤの王セナケリブは…その家来をエルサレムにつかわして、ユダの王ヒゼキヤおよびエルサレムにいるすべてのユダの人に告げさせて言った　ユダの民はヒゼキヤの信仰の言葉に安心したが（8）、敵は民の信仰を奪おうと誘惑してきた。

10～15　この演説は、列王紀に記されているものより簡潔にまとめられているが、その中心は、危機に直面している民を、イスラエルの神もアッスリヤが打ち破ってきた他の国民の神々と同様に無力であること、ゆえに神に頼まず、降伏せよということであった。セナケリブの目的は、イスラエルの神への信頼を崩すことにある。この一連の敵の脅迫による攻撃は、サタンの方法そのものである。

11　飢えと、かわきをもって、あなたがたを死なせようとしているのではないか　真の豊かさをもたらす神に対する侮辱。

12　このヒゼキヤは主のもろもろの高き所と祭壇を取り除き…と言った者ではないか　ヒゼキヤの宗教改革について言及している。これはヒゼキヤの忠実さに対する挑戦であった。

13～15　わたしおよびわたしの先祖たちが、他の国々のすべての民にしたことを知らないのか　これまでのアッスリヤの勝利に触れ、破れた国の神々は無力であったことを示し、同様にユダ王国の神もアッスリヤから救い出すことはできないと述べている。当時、人々は自らの盛衰を彼らが信じている神の能力と密接に関わっていると考えていたゆえ、民が滅びたのは、民の神の無力さのゆえであると結論づけている。

17 イスラエルの神、主をあざけり、かつそしって言った 主なる神に対する最大の侮辱は、主が他の神々、すなわち人の手で造られた、命なき無力な神々と同等のものにすぎないとされたことである（19）。しかし、同時にこのような神理解は、アッスリヤの王や家来たちが霊的に全く無知であり、愚かであることを示している。

18 ユダヤの言葉 これはヘブル語のこと。列王下18・26では、エルサレムのつかさたちがアッスリヤの使者に、民が聞いても理解できないようにアラム語で語るよう懇願している。アラム語は当時の外交用語であり、ヘブル語はユダの方言であった。この懇願は聞き入れられず、使者はユダヤの言葉で大声で呼ばわったのである。アッスリヤの主張を直接ユダの民に聞かせることは、民が自分たちには勝ち目がないと信じさせようとする心理作戦であった。このような敵の策略に対しヒゼキヤは民に対し、敵と論ずることを避け、黙するよう指示した（列王下18・36）。

20 ヒゼキヤ王およびアモツの子イザヤは共に祈って、天に呼ばわった この場面は列王紀下19章の並行個所に比べると、非常に短く、簡潔に記されている。そこには、ヒゼキヤが使いをイザヤに派遣したこと、ヒゼキヤの祈りの内容、そしてセナケリブの敗北を語るイザヤの預言等が含まれている。ヒゼキヤとイザヤは顔を合わせてはいなかったが、心を一つにして、共に主の前に祈った。この戦いは、実際には「舌戦」といえるもので、両軍とも何の役割も演じていない。これは信仰の戦いであり、勝利はこの祈りの後に起こった。

21 主はひとりのみ使をつかわして、アッスリヤ王の陣営にいるすべての大勇士と将官、軍長らを滅ぼされた 神は直ちに祈りに答え、敵軍を滅ぼされた。ここには敵の受けた被害については記されていないが、一夜のうちに18万5千人が撃ち殺された（列王下19・35）。**王は…自分の国に帰ったが…その子のひとりが…彼をその所で殺した** ここにセナケリブの死についても言及されている。イザヤの預言通りである。これはセナケリブが帰国して20年後（BC681年）の出来事である。これも祈りに対する神の答えであった。祈りの答えを、長期的な視点からも見る必要がある。

参考図書 マーティン・J・セルマン『ティンデル聖書注解 歴代誌第2』（いのちのことば社）、他。

8日　礼拝メッセージ例

聖　書　歴代下32・9〜22
タイトル　ヒゼキヤ
暗唱聖句　われわれと共におる者は彼らと共におる者よりも大いなる者だからである。
歴代下32・7
目　標　大いなる神の守りを信じて生きる。

（土屋開夫）

導入

「うわー、大変だ！　困った！　どうしよう！」

皆さんは、そんな「ピンチ」になった事がありますか？先生も今まで、小さいピンチから大ピンチまで数え切れない程のピンチに会いました。皆さんが今までで一番大変だった大ピンチはなんですか？（子ども達のピンチ話を聞いたり、CS教師の体験を短く話してもよい。）

でもね、こういう言葉があります。「ピンチはチャンス！」これを私たちに当てはめると、私たちはピンチの時、「神様、助けて下さい！」と、いつも以上に必死に、真剣にお祈りします。そうすると神様がその必死のお祈りに応えて下さって、思いがけない、素晴らしい助けを与えて下さるのです！　今日、登場するヒゼキヤ王様もそんな出来事がありましたよ。

神様を敬うヒゼキヤ王様

先週はレハベアム王様のお話をしましたね。ソロモン王様の後、残念ながらイスラエルの国は北と南に分かれてしまいました。ちなみに、正当な王様の血筋は南のユダ王国にあります。でも、ユダ王国の王様がみんな神様の前に正しく歩んだかというと、そうではありませんでした。偶像を拝むような悪い王様もたくさんいました。

でもその中で、今日のヒゼキヤ王様はとても素晴らしい王様でした。29・2には、「ヒゼキヤは父（父祖）ダビデがすべてなしたように主の良しと見られることをした。」と書いてあります。ダビデ王様のように、神様を信じ、敬う王様だったのです。ヒゼキヤ王様は、偶像を壊し、神の宮である神殿をきれいに整えて、もう一度ちゃんと礼拝がささげられるようにしました。そのようにヒゼキヤ王様は、神様を一番にしていました。

正しい人にも試練が

さて、そのようにヒゼキヤ王様が神様の前に良い事、正しい事、忠実な事を行った後、大ピンチがやってきました。とても強いアッスリヤという国の大軍団がユダの

国を滅ぼそうと迫ってきたのです！

「えっ、神様を一番に敬っている人にもピンチがやってくるの？」と、皆さんは思うかも知れませんね。そうです、神様を敬う人、イエス様を信じる人にも、ピンチはやってきます。父なる神様は私たちを愛しているからこそ、ピンチを与えて私たちの信仰をテストしたり、訓練したりされるのです。イエス様も、弟子たちを嵐の舟に乗せて、訓練された事がありますね。

アッスリヤの大軍は今にも襲いかかって来そうです。ヒゼキヤ王様は怖くなかったのでしょうか？　もちろん、怖かったと思います。でも、だからこそ神様を信じ、勇気を出しました。そして国のみんなを励まして言いました、「心を強くし、勇みたちなさい。アッスリヤの王をも、彼と共にいるすべての群衆をも恐れてはならない。おののいてはならない。われわれと共におる者は彼らと共におる者よりも大いなる者だからである…。」

私たちが頼みとしているお方は、この宇宙を造られた父なる神様だ！　そして死と悪魔に打ち勝った神の御子イエス様だ！　この神様が私たちの味方なのだから、何も心配いらない、大丈夫だ！　と信じる事がとっても大切です。恐れに打ち勝つ信仰です！

そしてヒゼキヤ王様は預言者イザヤと一緒に、必死にお祈りしました。一人でお祈りするより、誰かと一緒にお祈りすると、そのお祈りはもっと力強くなります。

そうして祈ったら、スゴイ奇跡が起きました。なんと神のみ使いがアッスリヤの大軍（十八万5千人）をやっつけてくれたのです！（その方法は伝染病だったとも言われています。）アッスリヤの王様は国に逃げ帰り、なんと自分の息子に殺されてしまいました。ユダの国は神様によって守られたのです！

まとめ

子どもでも大人でも、必ず色んなピンチがやってきます。でも、覚えていて下さい。神様を信じ、イエス様を信じている私たちには、乗り越えられないピンチは一つも無いのです！　ピンチの時は、信じて、一生懸命に祈って下さい。なんでもできる神様とイエス様が、あなたの味方なのです！

♪歩こうイエスの道を♪（PW15、イン81）

聖書 エステル4・1〜17
テーマ エスエル

（髙橋頼男）

序論

エステル記は、ペルシャ王アハシュエロス（クセルクセス）の時代に首都スサの王宮においてユダヤ人である王妃エステルが活躍した物語です。ユダヤの祭りである「プリム祭」の起源を説明するもので、エステルが王妃に選ばれる経緯、ハマンの陰謀とエステルの命がけの活躍、ユダヤ人の救いと敵ハマンの滅亡が記されています。

一、王妃に選ばれたエステルの使命

王宮では政治の外に置かれていたエステルに対してモルデカイは、ハマンによって計画された民族絶滅の危機が迫っていることを告げました。そして今こそエステルが王妃の立場を用いて命を懸けた働きをなすべきだと諭します。〈あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう〉。

神は、モルデカイもエステルも願ったわけではないのに全てのことを働かせ、国中から集められた美女たちの中から特別にエステルを選び、王妃となる栄冠を得させられました。そして、エステルは王宮に住み、思いもしなかった特権と名誉を得たのです。それは何という光栄と祝福でしょうか。しかしそこには、神のご計画があることを忘れてはなりません。自分の喜びや名誉のためにそのような祝福を受けたのではありません。神は無目的に人を選ばれることはありません。神の選びや祝福には、必ず神の大いなるご計画と期待が秘められているのです。その大いなる務めのためにこそ、彼女は思いがけない栄誉を受け王妃にまで引き上げられたのです。神は、この時のために、すなわち、民族撲滅の危機からご自分の民を救うために、エステルを備えておられたのです。

私たちに与えられている世や社会における立場や栄誉は、私たちの自己目的の人生や満足のためにではなく、神が期待しておられる使命を果たし、奉仕する機会であることを忘れてはなりません。

二、エステルの決断

神のご計画と導きに対して、人の側での信仰と従順の応答がなされなければなりません。そして、その従順は時には命を懸けるほどのものです。

エステルは何としても、至急、王の前に出て嘆願しな

ければならないと思いました。しかし、王の好意を受けていたエステルではありますが、もう一カ月も王の招きはなく、自分から王の前に出ることは許されていなかったのです。王の身が守られるため、だれも王の招きなく近づくことは出来ず、勝手に近づく者は身分立場を問わず死刑になるという法律がありました。ただし、王が笏をのべる者には命が守られ近づくことが許されるのです。そこでエステルは決断をしました。三日の断食を依頼し、神が王の心を動かしてくださるようにと祈りを求めました。そして、自らは〈わたしがもし死なねばならないのなら、死にます〉と、自分の命を神のみ心に全く委ね、その結果がどうであろうと従う決心をしたのです。

三、ユダヤ人の救い

この結果、ユダヤ人撲滅というハマンの計略は失敗し、ハマン自身が自分の立てた計略によって失脚し命を失うことになりました。王は、新しい勅令を出してユダヤ人に対する恩恵を施し、その命と財産を守るようにしたのです。その結果、敵は滅ぼされ、ユダヤ人は驚くべき勝利を収めることができたのです。

神は、神を知らない人々や異教社会にあって、人間の政治、社会、個人の生活の中にまでも働かれ、摂理をもって神のご計画を進められています。そして、神のご計画に従って忠実に、信仰によって応答し、神のためには身をささげて真剣に応答する人を用いてみ心をこの世に成し遂げられるのです。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる…」（ローマ８・28）。

この書には神の名が一度も出てきません。しかし確かに神は生きて働かれ、神の民を敵の恐ろしい計略と力から守り、見事に敵を打ち破ってくださいました。神はこの地（異教国、偶像崇拝、神を知らない人々の社会、支配）にある神の民（クリスチャン）を、大きな憐れみと見えない摂理の手をもって、悪しき者の手と試みから守り救ってくださるのです。この世の権力と支配の現実の中で、神が見えず神がわからなくなるようなことがあります。しかし、神はご計画のうちにそのみ心を成し遂げ、見えない摂理の御手をもって働いておられるのです。

結論

神を信じて熱心に応答し、委ねられた神からの使命に身をささげいく者となりましょう。

研究資料

（小平徳行）

エステル記はエズラ記、ネヘミヤ記と同様、バビロン捕囚帰還後の歴史を背景としている。バビロンを滅ぼしたペルシャ王クロスは、BC539年に勅令を出し、ユダヤ人を故国に帰るように促した。しかし帰還した民はわずかで、大部分はペルシャに残留した。本書の記事はゼルバベルが第一部隊を率いて帰国し、神殿再建を果した第一期（エズラ1～6章）とBC458年のエズラ帰還の第二期（エズラ7～10章）の中間に起こった出来事を記している。この時の王はアハシュエロス（クセルクセス）、舞台はペルシャの首都スサである。このときペルシャにいるユダヤ人は、ハマンによって計画された民族根絶の危機にさらされていた。しかし、この異邦の地に残留している神の民に対して、神は大きなあわれみを注ぎ、見えない摂理の御手をもって神の民を悪しき者の手から救われたのである。本書の特徴は、神の名が一度も出て来ないことである。人間の政治的、社会的、個人的な活動の中に神が摂理的に働かれて、神のご計画が必ず実現していく事を教えられる。しかし同時に、エステルやモルデカイが自分たちの置かれた場所において忠実に神の召しに信仰によって応答し、己を捨て、神のみこころに身をささげて、神の民と民の栄光のために生きたところに神のご計画が実現したことを覚えるべきである。

テキスト

1～3　衣を裂き、荒布をまとい、灰をかぶり　これらは悲しみを表わす行為であり、イスラエルだけでなく広く古代オリエントで行われていた（イザヤ15・3、ヨナ3・5～6等）。各州のユダヤ人もモルデカイと同様の反応を示している。彼らはただ悲しんだだけではない。本書は宗教的行為を表面に出していないが、これらの行動で神への悔い改めと嘆願の祈りを暗示している。

4　エステルは政治の動きの外に置かれていたためモルデカイの悲しみの理由を知らなかった。**受けなかった**モルデカイが着物を受け取らなかったのは、彼の悲しみが容易になだめられるものではなく、なお祈り続ける必要を感じていたからであろう。

11　すべて召されないのに内庭にはいって王のもとへ行く者は、必ず殺されなければならない　この法律は王の生命を守るため、またささいな問題で王を悩ますことが

ないために定められ、勝手に近付く者は身分を問わず死刑となった。したがって王がエステルを招くのでなければ、王のところに行くことはできなかった。ここまで一ヶ月間エステルは王から招かれておらず、王に嘆願するのは困難な状況であった。**笏**　王の権威を表わす杖。

13〜14　モルデカイはこの危機的状況から救われるために、エステルを懸命に説得した。**あなたは王宮にいるゆえ…難を免れるだろうと思ってはならない**　エステルもユダヤ人虐殺の命令の対象外ではない。**ほかの所から**　モルデカイはエステルが事を起こさなかったとしても神はエステル以外の方法を用いてユダヤ人を助けてくださると信じていた。それは神の民に対する約束を信じる信仰から来ている。**あなたとあなたの父の家とは滅びるでしょう**　神の召しへの不従順は自らとその家の滅びを刈り取ることになるという警告。**あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう**　モルデカイはエステルの生命をかけた働きこそ神の御旨であると確信していた。ゆえに与えられた立場を最大限に用いるようエステルを励ました。これは神の摂理に対する信仰である。モルデカイもエステルもすんで王妃を目指したわけではなかったが、全ての状況が働いて彼女は王妃となった。これは今回の危機のために神が人の思いを超えてあらかじめ準備されていたのである。

15〜16　**三日のあいだ**　通常、断食は一日のみであったので、この要請は、この責務が非常に重大であることを認識していたことを表わしている。これはとりなしの祈りの依頼である。王の心を動かすのは自分ではなく神であると信じていた。**わたしがもし、死なねばならないのなら、死にます**　これはあきらめではなく自分の生命を神のみこころに完全にゆだねて、自らを明け渡して従う決意を表わしている。

　この結果、ハマンを失脚させることに成功し（5〜7章）、王は新しい勅令を出してユダヤ人自らの手でいのちと財産を守るようにし、ユダヤ人は勝利を収めることができたのである（8〜9章）。

参考図書　鈴木昌「エステル記」『実用聖書註解』、工藤弘雄『新聖書講解・エステル記』（以上いのちのことば社）、C・E・デマレイ「エステル記」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇2』（イムマヌエル綜合伝道団）他

15日 礼拝メッセージ例

聖　書　エステル４・１〜17
タイトル　神様から与えられた使命に生きよう！
暗唱聖句　わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。　エステル４・16
目　標　神からの使命を命がけで果たす者となる。

導入

皆さん、「使命」っていう言葉を知っていますか？　漢字で「命を使う」と書きます。人が果たすべきとても大切なつとめのことです。「命をかけてオリンピックで金メダルをめざす」とか、「この仕事のために命をかける」などと聞いたことはありませんか。今日は、神さまから与えられた使命を、命をかけて果たした女性のお話です。

（和田牧子）

エステルの使命

その人の名は「エステル」。ユダヤ人です。バビロンの次に世界をおさめたペルシャの都に住んでいました。その国の王さまアハシュエロスは、新しい王妃を国中の若い美しい女性の中から選ぼうとしました。たった一人、王妃として選びぬかれたすてきな女性、それがエステルでした。

ところで王さまのもとにハマンという地位の高い家来がいました。王の門にいる家来たちは、ハマンが通るとき、みな「ハマンさまのお通りだ！」とひざまずいて敬礼しました。しかしエステルを育てたユダヤ人、モルデカイだけは敬礼しなかったのです。

怒ったハマンは、王さまを上手にだまして、モルデカイと、その出身の民族であるユダヤ人全員を殺すように命令させたのです。若者、老人、こども、女性の別なく、全員です。なんて残酷なのでしょう。

「ううー、なんということだ！」。モルデカイは、あまりのことに大声で叫びながら、荒布をまとい、灰をかぶってなげき悲しみました。同じように全てのユダヤ人も、悲しみと恐怖でいっぱいになりました。

心配したエステルは、使いをやってモルデカイにわけを聞きました。そこで初めて、自分たちユダヤ人が皆殺しにされようとしていることを知ったのです。モルデカイは、エステルから王さまにお願いして、「ユダヤ人の命を助けてほしい！」と告げました。

それを聞いたエステルは困りました。モルデカイに再

び使いをやりました。

「この国では、王さまからお呼びもないのに王宮の庭に入れば、その場で打ち首なのです。王さまが金のしゃくをのべてくだされば別ですが…」。

王さまのいのちを守るため、王さまに勝手に近づく者はどんな身分の人でも死刑だったのです。たとえ王妃であっても、王さまが招いた時にしか会えませんでした。しかもこれまで一ヶ月間、エステルは王さまから招かれていなかったのです。エステルにとって、王さまに何かをお願いするのは、命がけのことでした。

モルデカイは言いました。

「あなたは王宮にいるから助かるだろうと考えてはなりません。もしあなたが黙っていたら、別の所からきっと助けがあるでしょう。でもあなたは滅びるでしょう。あなたがこの王国に来たのは、この時のためかもしれないのですよ！」

エステルの決断

そこで、エステルは答えました。

「行って都にいるすべてのユダヤ人を集め、三日間なにも食べないで祈って下さい。私も祈ります。そして法律にそむくことですが、王のもとへ行きます。私がもし死ななければならないのなら、死にます」。エステルは、使命のために命をかける決心をしたのです。

三日目、エステルが王さまにお願いしようと庭に入りました。すると、王さまのしゃくがエステルに伸ばされ、王さまはエステルのお願いを聞き入れたのです。こうしてハマンの立てたユダヤ人全員を殺す計画は失敗し、代わりにハマンが王さまに処刑されたのです。

今日のお話でわかることがあります。王さまがエステルの願いを聞き入れたのは、神様がエステルやモルデカイのお祈りに応えて下さったからということです。そもそもエステルが王妃に選ばれたのも、ユダヤ人にとって大ピンチのこの時のために、神様が備えて下さったのですね。

結び

エステルの使命はユダヤ人を救うことでした。皆さんの使命はなんでしょうか。神様は一人ひとりに使命を与えて下さっています。わたしたちたちを通して、神様のすばらしさを伝えるようにと。「私をお用い下さい。私はあなたのものです」とお祈りしましょう。

♪もちいたまえわが主よ♪（ホ113）

聖　書　マルコ7・14〜23
テーマ　人を汚すもの

（宮澤清志）

序論

「パリサイ人」とは、ヘブル語で「分離する」という意味に由来する言葉から来ており、「分離された者たち」という意味の言葉です。では、何から「分離」されているかといえば、一般的には、モーセ五書に記されている「レビ的聖め」を守れない者たちから「分離された」者たち、といわれています。この個所は、そのようなパリサイ人的な考えがあらわされている典型的な個所であるといえます。

一、「神の戒め」か「人の言葉」か

新共同訳聖書では、この個所は一節から二三節までが一つの区切りとなっています。この個所には「昔の人の言い伝え」「人間の言い伝え」「自分たちの言い伝え」と、私たちにとっては似たような意味の言葉が並んでいます。これら「言い伝え」と対照的な言葉として「神の戒め」という言葉を聖書は用いています。

この個所では、パリサイ人や律法学者たちが「神の戒め」にまして「自分たちの言い伝え」を重んじている姿を見ることができます。結果、信仰生活は形式化し、内実を失い、ついには生命さえも失ってしまうのです。

イエスはこのようなパリサイ人たちの、「人間の言い伝え」を「神の戒め」にとって変えようとする姿そのものを問題にしようとしているのです。決して不浄な手でパンを食べたという外面的な行為そのものを問題にしているのではありません。彼らは「パリサイ人の慣例に沿った方法」によって手を洗わなかった、と指摘していたのです。すなわち主はパリサイ人の言い伝えによる手洗いを問題にしたのです。

私たちは、しばしばこのような「伝統」「言い伝え」「決まりごと」によってがんじがらめにされていることはないでしょうか。

二、「神の聖さ」か「人の汚れ」か

しかし、ここでは、それまでの「言い伝え」よりも、もっと中心的な主題が語られます。それが「聖さ」というものであり、その対極にある「汚れ」の問題です。

しかも、聞き手の対象も、それまでの「パリサイ人」「律法学者」のほかに「群衆」が加わります（14）。それ

は、これから語られることは、誰もが聞くべき言葉であり、また誰にも知ってほしいがゆえのイエスの願いが込められているのでしょう。そのイエスが律法学者・パリサイ人に加えて群衆に語られた言葉が「すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない。かえって、人の中から出てくるものが、人をけがすのである」（15）という言葉です。パリサイ人達は、何よりも、彼らの外側にある、この世の汚れから自分たちを「分離する」ことに心を配っていたのです。ここに見られる本質こそが、彼らを「パリサイ人」と呼ばせたのです。

しかし、どうやらイエスの語られたことは弟子たちにはわからなかったようです（17）。そこでイエスは更に弟子たちに語られます。

本日の聖書の個所で語られている「汚れ」とは、「普通の・共通の・日常的な」という言葉からきています。私たちは、アダムの罪以来、日常的に「汚れ」の中におかれています。その結果、21~22節にある「罪のリスト」に示される罪を犯すことになるのです。

三、汚れを除き去ること

では、私たちは、自分で自分の心をきよくすることができるでしょうか。パリサイ人たちは、自らをこの世の汚れから分離することによって、自らをきよく保とうとしたのです。しかし、実際はこれとは全く逆の結果となったのです。結果として彼らは罪のリストに示されるような罪に支配されることとなるのです。自らの外側を変えようと必死になるあまり、自分の内側の罪や神のあわれみにに目を留めることができなくなってしまったのです。私たちには、自らの心のうちの汚れを取り除くことができないのです。

結論

私たちの心のうちの汚れを取り除くためには「わたしは、聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」（レビ19・2、Ⅰペテロ1・16）と語られた主のもとに行くことです。そして、私たちは自分の心の中にある汚れを素直に認め、祈りのうちにそれを主のもとに差し出すことが必要です（Ⅰヨハネ1・9）。そのとき、聖霊ご自身が私たちの心のうちをきよくして下さるのです。私たちのすべてを聖霊のみわざに明け渡し、私たちの心を愛で満たして下さるよう、祈り求めましょう。

研究資料

（宮澤清志）

17節以降をよりよく理解するために14節からの研究資料を付す。この個所は、イエスとパリサイ人、律法学者たちとの論争の中でも大きなものの一つである「昔の人の言い伝え」についての論争の中の一コマである。イエスは、これらの論争を通して、外面的・儀式的規定よりも、人間の内側、心の状態の方がはるかに重要であり、儀式的形式的に律法を守るよりも、心において何を考え、何に従うかが重要であることを指し示しているのである。

テキスト

14 再び 6節から13節まではイエスのユダヤ教当局者に対する教えの言葉であり、本節からは群衆への教えの言葉である。ここからイエスの言葉の聴き手は群衆となる。**聞いて悟るがよい** 文法的に、今のこの瞬間の出来事として求める言葉である。集中して聞くようにというイエスの思いを込めた言葉であろう。

15 けがす（ギ）コイノオー） 基本的意味は「共有する」という言葉である。しかし、そこから派生して「日常の、世俗の、汚れた」という意味も併せ持つ。この個所では、悪しきものは神が創造された自然の世界の中にあるのではなく、人間自身の内側にあるのであるということを指し示す。

16 この節はいくつかの写本（古代の手書きの聖書）には欠けていることから、括弧に入れられている。

17 この節からは、再び場面が転換する。前節までは群衆に対する教えであり、主はわざわざ群衆を呼び寄せて語られた（14）。しかし、イエスが語られた言葉を弟子たちが理解できなかったのか、弟子たちのほうからイエスに質問する。

18〜19 「人の心の中にはいる」（19）「内部（心）から」（23）とあるように、神との関係においては外的・物的なものではなく、心が決定的に重要であることを再び語る。**イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた** マルコによるこの個所の解説である。旧約聖書には「食物に関する規定」（レビ11章）があり、ユダヤ人たちにとっては清い食物と汚れた食物とが明確に区別されていた。しかし、イエスは、このような区別は形式的な意味しかなく、食物自体が汚れているとは考えなかった。

それゆえこの個所は、イエスによる旧約聖書の新しい理解が明らかにされている非常に重要な個所なのである。

21〜23　ここから次の節までは、いわゆる「悪のリスト」とよばれるものである。この「悪のリスト」については、ほかにローマ1・29〜31、ガラテヤ5・19〜21、Ⅰテモテ1・9〜10、Ⅱテモテ3・2〜5等に見ることができる。この個所の特徴として、全12個のリストのうち、前半の6個は複数形で書かれていることから、繰り返される行為、行為における悪について取り扱われており、後半の6個については単数形で書かれていることから悪徳のリストであろうと言われている。

なお、このリストに先だって「悪い思い」を入れている。この「悪い思い」とは、これらの悪徳表に登場する諸悪の根源という意味である。

不品行　22節の「姦淫」よりも幅の広い言葉で、あらゆる種類の不法な性的行為を指す。**姦淫**　結婚した夫婦が相手を裏切って不貞を働くこと。**貪欲**　神の中にではなく、物事の中に幸福を見出す人の心にある、所有の欲望であり、「単に金銭ばかりでなく、あらゆることにおいて、いつも自分のために隣人を犠牲にすることを意に介さない性質」と定義する学者もいる。**邪悪**　人や物で積極的に悪を行うこと。**欺き**　人と人との関係を損ない、かつ教会員としての生活に対立する行為様式の一つ。**好色**　性的不摂生をも包含するところの、人間に内在する「より多くを求める性向」に基づく行為であり、「すべてのしつけを恨む心の傾向」である。**妬み**（ねた）　元来、ギリシャ語のもとの言葉では「悪い目」という意味の言葉である。この語は「魔法をかけるような目つきで悪意をもって人を見ること」というような意味を持つ。**誹り**（そし）　新共同訳では「悪口」となっている。これが神に対する人の行為として用いられる場合は「冒涜」となり、人間同士の場合には「そしり」「悪口」となる。**高慢**　ギリシャ語の本来の意味は「自分自身を超えて示す」「みずからを上に示す人」となる。特に、表に出てこないような、心の奥底での態度を指すときに用いられる言葉である。**愚痴**　新改訳聖書では「愚かさ」、新共同訳聖書では「無分別」とあり、頭脳の「愚かさ」ではなく、道徳的にばかげた行為、愚行を行う者を意味するのである。

参考図書　W・バークレー「新約聖書ギリシャ語精解」（日本基督教団出版局）他

聖　書　マルコ7・17〜23
タイトル　人を汚すもの
暗唱聖句　これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである。　マルコ7・23
目　標　内面の罪に気づき悔い改める者となる。

導入　（後藤　真）

洗濯機は服をきれいに洗ってくれる便利な道具です。でも長く使っていると、洗濯機の中に汚れがたまってしまいます。見えないところにたまった汚れのせいで、洗濯物が臭くなることもあるそうです。

「そんなときにはこちら、洗濯槽用洗剤！　今なら一本買えばもう一本ついてきます」

なんて、テレビショッピングが始まりそうですが、わたしたちの心の中はどうでしょうか。心の中は見えませんが汚れがたまっているということはないでしょうか…

言い伝えと神のいましめ

イエス様の時代に、パリサイ人と呼ばれる人たちがいました。パリサイ人たちは旧約聖書の教えを大切に守る人たちでした。でもそれが行き過ぎて、旧約聖書を規則のように受け止めていました。そして規則を守るためのいろいろな言い伝えを作って、それを守るように人に教えていました。

パリサイ人たちはイエス様の弟子たちが、自分たちの守ってきた言い伝えを守らないのが気に入りませんでした。パリサイ人たちは、ごはんを食べる前に長い時間をかけて手を洗う儀式をすることを守ってきましたが、イエス様の弟子たちはそれをしませんでした。パリサイ人たちはこういうことにいちいち目くじらをたて、イエス様に文句を言うのでした。

イエス様はそんなパリサイ人たちの心を知っておられました。パリサイ人たちが聖書の教えを大切にしているふりをして、本当は神様のことをこれっぽっちも考えていないことが分かっていました。「神殿に献金をすれば、お父さんとお母さんのためにお金を使わなくていい」というへんな言い伝えを作って、「父と母を敬え」という大切な神様の教えを守らなくてよいようにしていました。目に見える行いは立派に見えても心の中は嘘ばかり。パリサイ人たちは聖書に表された神様の思いなんてぜんぜん考えていなかったのです。

7月 22日 礼拝メッセージ例

人の中から出てくるもの

イエス様は弟子たちに、

「人の外から中に入って、人をけがすことができるものはない。人の中から出てくるものが人をけがすのだ」と言われたことの意味をお話されました。

「口から入ってくる食べ物が人間をけがすのではないでしょう。でも人の心の中から何がでてきますか？　悪い思い、けがれた行い、盗み、殺し、みだらな行い、よくばり、悪い考え、ねたみ、悪口、高ぶり、愚痴…」

弟子たちはドキッとしたでしょう。自分たちの心の中にもそういうけがれたものがあったからです。弟子たちはよく、弟子の中でだれがいちばんえらいだろうかと、争いました。こういう高ぶった気持も自分たちの心の中から出てくるものでした。

どんなに立派に見えても、心の中にきたないものがあれば、まわりの人々を傷つけてしまう。どんなに聖書のことを勉強して知っているつもりでも、心の中にきたないものがあったら、聖書を通して示されている神様の思いが分からない。聖書よりも自分たちが考えた言い伝えの方を大切にしてしまうのです。

心の中をのぞいてみよう

わたしたちも自分の心の中をのぞいてみましょう。よくない思いはありませんか。人をねたんだり悪口を言ったりするところはありませんか。人をねたんだり悪口を言ったりするところはありませんか。また、自分の考えの方が大切で、聖書の教えや、イエス様のことばを聞きたくないなあと思うところはありませんか。良い子にして礼拝しているけれども、実は心の中では神様とはぜんぜん違うことを考えているということはありませんか。

きれいに洗濯したシャツでもくさいにおいがついていたら着ることができません。わたしたちの行いが立派に見えても、心の中のきたないものがプンプンにおうならイエス様の素晴らしさは伝わりません。

でもだいじょうぶ。イエス様はわたしたちの心の中のきたないところを知っていてくださいます。恥ずかしがらずに、自分の心のきたないところを悔い改めてイエス様にお祈りしましょう。イエス様は、わたしたちを内側からきれいにしてくださるのです。

♪ぼくの心の中が♪（PW4、イン42）

聖　書　Ⅰコリント15・3〜8
テーマ　キリストの死と復活

（石田高保）

序論

イエス様の身代わりの死も、死人の中からの復活も、信じない人には愚かで受け入れがたいものです。しかしこの二つの出来事は信じる人にとっては教義である前に信仰上の事実なので、冷笑を浴びても否定しようがありません。だからといってこれだけを主張していれば神の国が前進するというほど、この世は単純でもないでしょう。み言葉とこの世とを橋渡しするところの聖書的な価値観を提供する必要があります。聖書が実際生活に役立つことを知っていただくための工夫がいるのです。実体験に基づいたほんとうの話が人の心を動かし、キリストを求める心を奮い起こすのではないでしょうか。その意味でパウロ自身も〈受けたこと〉、つまり体験したことを四つ挙げています。それはキリストが死んだこと、葬られたこと、よみがえったこと、弟子たちに現れたことで、福音の神髄です。救われてからもこのことを確認し続ける必要があります。〈この福音によって救われる〉直訳すれば、「救われ続ける」です。

一、キリストの死（死んだことと葬られたこと）

〈キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと〉とは、聖書のどの個所を指しているのでしょうか。よく知られているところはイザヤ書53章でしょう。ここにはキリストがやがて現れ、人類の罪をあがなうために死ぬことが未来完了的に預言されています。「その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ」（イザヤ53・5）。私たちはこの事実を自分の身の上に適用し続ける必要があります。理性や知性でわかることではなく、聖霊のお働きによってわからせていただく性質のものです。

〈そして葬られたこと〉、主が身代わりとなって死んだことを受け入れればそれで十分に思います。確かに救われるためにはそうですが、救われた後に自分の信仰をより確かなものにするためには主が葬られた事実も大事です。使徒信条でも「死にて葬られ」と記されています。なぜなら葬りはイエス様が本当に死んでしまったことを証明しているからです。イエスは実は死んでいなかった、瀕死の状態から蘇生しただけだという考えを打ち消すものです。金曜から日曜まで足掛け三日間も葬られていては息の吹き返しよ

うがありません。また葬りが、復活するための大前提となっているから重要です。完全に死んだからこそ復活は人類史上、空前絶後の大事件になりうるのです。葬りの事実は復活の事実を際立たせます。

二、キリストの復活（甦ったことと現れたこと）

〈聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえった〉、これもイザヤ書を指していると見ることができます。「彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる」（53・10～12）。パウロ自身、復活のキリストに出会ったことがきっかけとなって回心しています（使徒9章）。クリスチャンの誰もが彼のような鮮やかな経験をして救われているわけではありません。むしろそういう人は珍しいでしょう。ほとんどの人はイエス様を見ないで信じています。それもキリスト教の教義を信じたのではなく、目には見えないイエス様を心に受け入れたのではないでしょうか。復活という教義を受け入れたのではありません。しかしその時、クリスチャンはキリストの復活を信じたのです。イエス様を受け入れたということは、復活して二千年間ずっと生き続けておられるイエス様を受け入れたことになります。自分はほんとうにキリストの復活を信じているのだろうかなどと疑問に思う必要はありません。主が共におられることがわかっているなら、すでに復活を信じている証拠です。

〈ケパに現れ、…現れ、…現れ、…現れ、…わたしにも現れた〉、イエス様が復活するだけで誰の前にも現れなかったとしたら、キリストの復活を証明する人はおらず、人を説得することもできないでしょう。イエス様は復活してから昇天するまでの40日間、弟子たちに何回も現れました。最も多いときは500人の前に現れました。キリストの復活を証明するためには十分すぎることで、出会った弟子たちは幻覚でも幽霊でもなく、よみがえったほんもののイエス様であることを思い知りました。この体験と聖霊に満たされることで初代教会の宣教は一気に拡大するのです。

結論

パウロが最も大事なこととして伝えたこと、それは主が死んだこと、葬られたこと、よみがえったこと、現れたことですが、現代の私たちもこれを折々に確認し、主に信頼し続けてゆきましょう。

研究資料

（小平徳行）

コリントのある者たちは、死人の復活を否定していた。しかし、パウロはキリストの復活こそクリスチャンの復活の裏付けであることを示し、自分が伝えた福音にしっかり立つように励ましている。

テキスト

3　わたし自身も受けたこと　福音の継承的特質が強調されている。パウロの伝えた福音は彼の創作ではなく、彼自身も受けたこと。その中心が以下に続くが、それらは初代教会が伝承してきた教えの概要である。これがケリュグマ、初代教会の宣べ伝えた福音の告知であり、パウロはこれを最も大事なことと見なしている。これを信じなければ、私たちのクリスチャンとしての本質的な立場は失われる。**キリストが…わたしたちの罪のために死んだこと**　キリストの死は贖いのため。つまり、わたしたちの罪（キリストご自身は無罪）の赦しのための身代わりの死である。**聖書に書いてあるとおり**　キリストの出来事は、聖書に預言されたものであり、人の思いつきではないことを表している。キリストの死と復活について、イザヤ53章や詩篇16篇等に記されているが、特定の個所というよりは、旧約聖書全体にわたり預言されていると見るべきで、そのように主ご自身が教えられた（ルカ24・26～27、44～47）。

4　そして葬られたこと　キリストの葬りは四福音書すべてに記されており、この簡潔にまとめられたものにさえ言及されている。これはキリストの死の確実さを示す重要なものである。**三日目によみがえったこと**　これは受動形であり、御子をよみがえらせた御父の行為を強調している。さらに完了形でもあり、この状態は今も続いていることを示している（死んだこと、葬られたことは不定過去形、つまり過去のある瞬間において完結したこととして書かれている）。つまり、主の復活は現在にも関係があり、今も主は生きておられることを表している。

5　ケパに現れ　「ケパ」はペテロのアラム語名で「岩」の意味。復活されたイエスは、女性以外で、弟子たちの中では最初にご自身を現されたのがペテロであった（ルカ24・34参照）。主を知らないと三度も否認したペテロに対し、主が心を砕いておられたことが想像される。**十二人**　このときユダはおらず、実際その場に12人いたわ

けではないので一般名詞として使われている。

6　五百人以上の兄弟たち　このことについては福音書には記されておらず、この個所だけである。この顕現は重要である。この場面以外には、これほど大勢の人がよみがえりの事実を証言し得たことはない。**すでに眠った者たち**　死んだ者についての表現。死はだれひとり逆らい得ない敵対者であり、恐怖の念をもって思い浮かべるものであったが、クリスチャンにとっては眠りにすぎないものとなった。**大多数はいまなお生存している**　この手紙は紀元50年代半ば（キリストの復活後20数年後）に執筆されたと言われている。この時、大多数が生存中であった。つまり、キリストの復活について、今でもそれらの人々の証言を引き合いに出せるということである。

7　ヤコブに現れ　これは主の兄弟ヤコブであることに同意している者が大部分である。この顕現を通してヤコブを回心に至らせ、そのヤコブを通して残る兄弟全員が回心に至ったのではないかと思われる。イエスの兄弟たちは、イエスの公生涯における宣教中には信じなかったが（マルコ3・21、ヨハネ7・5）、イエスの昇天後、聖霊を待ち望む120人の弟子の群れに加わっていた（使徒1・15）。そして、後にエルサレム教会の指導者となったのである。**すべての使徒たち**　主は使徒たちに対して一人の欠けもなくご自身を顕わされた。これはイエスの昇天に際する顕現（使徒1章）のことであろう。

8　そして最後に…わたしにも現れたのである　パウロは自分が見たダマスコ途上での幻を、他の復活顕現と同じ水準に置き、自分自身を復活の主に出会った人々の系列の最後の者であると見なしている。**月足らずに生れたような**　十二弟子がイエスと数年、時を共にしてきたのに対し、パウロは予定通りの胎時期を経ずに、使徒たちの群れの中に産み落とされた者として見ているともとれるが、次節で語っているように、彼が教会の迫害者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者であることを認めたパウロの謙遜の表現でもある。

　このように復活の証人を列挙しているのは、イエスの復活の重要性を示唆している。パウロは復活信仰がどれほど固い基盤の上に立っているものなのかを明らかにして、信仰の基礎を据えている。

参考図書　レオン・モリス『ティンデル聖書注解　コリント人への手紙第1』（いのちのことば社）、他。

聖　書　Ⅰコリント15・3〜8
タイトル　イエス様の死と復活
暗唱聖句　キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと…三日目によみがえったこと。
Ⅰコリント15・3、4
目　標　キリストの十字架の死と復活が私たちのためと知り、キリストを信じる。

導入

皆さん、夏休みにはどんな自由研究をしますか？　時間のある夏休みを利用して、いろいろな調べものをする事はとても楽しく有意義なことですね。今日はキリストの十字架と復活について調べた人のお話をしましょう。まずは、とても優秀な一人の新聞記者を紹介したいと思います。

（松浦みち子）

リー・ストロベルさん

一九五二年1月25日生まれのリー・ストロベルさんは大学で法律を学び、シカゴ・トリビューン紙の記者として活躍していました。夫人がクリスチャンになったのをきっかけに新聞記者として、ある事件を調べ始めたのです。ある事件とは、いったい何だったのでしょう。それは2千年前に有罪判決を受けて死刑にされたイエスという犯罪人の事件をもう一度調べたのです。膨大な資料や本を調べ、歴史学者、考古学者、宗教学者、言語学者というようにいろいろな立場の人にインタビューしました。彼は、イエスの十字架の死だけでなく、死後の復活についても、それは本当のことか？　と徹底的に調べました。何冊も本を書いていますが、日本語には「ナザレのイエスは神の子か？　キリストを調べたジャーナリストの記録」（いのちのことば社）、「イエス・キリストって信じていいの？」などが翻訳されています。彼は聖書に記されたキリストの真実性を徹底的に検証し、疑いに真正面から立ち向かい、克服していったのです。その結果、彼は一九八一年にクリスチャンになり、やがて教会の教育担当牧師となりました。現在はカリフォルニアに在住して次々と著書を書いています。

使徒パウロ

リー・ストロベルさんも、キリストの復活は事実かと真剣に調べましたが、すでに2千年前にキリストの復活

の事実について調べた人がいます。それは使徒パウロです。パウロは、イエス様の弟子たちのように、イエス様と寝食を共にしたわけではありません。イエス様の死後、クリスチャンたちを「あいつらは神を冒涜しているけしからんやつだ！」と、迫害し殺すようなことにも手を染めていました。しかし、迫害に向かう途中のある日のこと、突然天から「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いたのです。「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」と復活のイエス様の語る声を聞きました。彼はこのような特別な経験を通して、復活の主に出会い、イエス様を信じる者となりました。ですからパウロは、他の使徒たちとは違い、よけい真剣に十字架と死、復活について調べ、考え、神様から教えていただいたのです。

最も大事なこと

パウロが最も大事なこととして伝えたのは、自分が考えたことや、思いつきを語ったのではなく、パウロ自身も受けたことでした。そしてそれは「聖書に書いてあるとおりに」と記されているように、みことばに裏付けられた事がらでした。

①キリストの死（イザヤ53・4～8）、②葬り（マタイ12・40、イザヤ53・9）、③復活（詩16・10、49・15、ホセア6・2、）④人々の前に現れたこと。

復活されたイエス様は、先ずケパ（ペテロ）に現われ、次に、十二人の弟子たちに、復活されたお姿を現されました。それから五百人以上の人々にも姿を現されました。

イエス様の復活は夢物語ではありません。多くの証人がいる、ゆるぎない事実の出来事です。何とすばらしいことでしょう。

イエス様は、わたしたちの罪をゆるすため身代わりとなって死んでくださいました。そしてイエス様が復活されたことは、わたしたちが死んだ後、まったく新しい体が与えられることへの希望です。さらに、死に対する勝利です。人間にはどうしても勝利できない最後の敵である死も乗り越えることができるという保証です。パウロは命がけでこの事実を伝えたのです。あなたもイエス様を信じ、永遠の命に生きる者となりましょう。

♪神のお子のイエスさま♪（ふ74、ホ74）

聖　書　マルコ1・14〜15
テーマ　悔い改めて福音を信ぜよ

（大頭眞一）

序論

主イエスは、年およそ30歳で公に宣教の働きを始められた。その時語られた福音とはどのようなものだったのであろうか。まず福音はよき知らせ、グッドニュースであることを十分に理解したい。ニュースとは事実の報道である。信じるかどうかは聞く人次第であるけれども、聞く人の反応に関係なく事実は存在する。第二次世界大戦が終ったニュースを信じないで、30年間ジャングルの中で戦い続けた方がおられたことをご存じだろうか。何という悲劇だろう。

一、時は満ちた

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（創世記3・15）という御子の派遣の約束以来、繰り返されてきた神の恵みの支配の預言はついに実現した。その時がきたのである。

時が満ちたのは、神がそのイニシアティブを取って満ちさせられたからである。神は損なわれた世界を回復するために主イエスを遣わされた。時が満ちたから主イエスが来られた、というよりもむしろ、主イエスが来られたから時が満ちたのである、と覚えたい。「わたしよりも力のあるかたが、あとからおいでになる」（1・7）と言ったバプテスマのヨハネは、自分が時が満ちる直前の人であることをよく知っていた。

〈時は満ちた〉の持つ圧倒的な勝利の響きに注意したい。次の〈神の国は近づいた〉に見られるように、神の国は始まったけれども完成していない。けれども、新約聖書において支配的なのは「始まった」の響きである。決定的に新しい時代が到来した。主イエスが来られた世界はもはや以前の世界と同じではない。だから救いは今、ここで可能なのである。

二、神の国は近づいた

神の恵みの支配である神の国が始まる以前には、人々はサタンとその悪の力の支配の下にあった。罪と悪魔の圧制からの救いこそが神の国のもたらす現在の実であ

る。しかし、この解放のために御子の十字架があったことを忘れてはならない。「・・それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである」（ヘブル2・14～15）とあるように。

始まったけれども完成していない神の国において、死はいまも存在する。しかし永遠の命は死を超える。誘惑は今も存在する。けれどもキリストと一つにあるならば、私たちは罪から守られる。病の床も悲しみに終わらず、賛美と証の祭壇となる。このように、私たちは完成へ向かう世界の中で苦しみつつ喜び、歌いつつ痛む。そうしている内にも神の国は成長している。そしてやがて主が再臨なさるときに、損なわれた世界に完全な回復が訪れるのである。

三、悔い改めて福音を信ぜよ

ここに福音の宣言は単なる宣言にとどまらず、私たちへの招きとなる。すでに始まった神の国へ飛び込むようにと主はお命じになるのである。

神の主権は人間の自由な応答と共存する。救いは一方的な神の恵みでありながら、人間の側の応答なしには成立しない。これがアルミニウスやウェスレーの信じた神人協働説である。つまり、もし誰（だれ）かが滅びるならその責任は神ではなく、招きに応答しなかった人間の側にある。

招きへの応答は悔い改めとイエス・キリストへの信仰である。〈悔い改め〉（ギ）メタノイア）は心の向きを転換するという意味をもつ言葉。自分の罪に気がつき、赦（ゆる）しを乞（こ）うて、これまでの自分中心に生きてきた生き方を神中心に転換することである。悔い改めと信仰を切り離すことはできない。「罪を悔いて赦しを求めることをしなければ、神を信頼して生きることはできない」（内田和彦著「『キリスト教は初めて』という人のための本」90頁）からである。

結論

今日の個所の直後、16～20節にはシモン・アンデレ・ヤコブ・ヨハネの4人の弟子への召命と彼らの即座の服従が描かれている。もちろん、これは彼らだけのことではない。福音を聞くすべての人は、このように主イエスを信じて従うことを期待されているのである。

研究資料

（宮澤清志）

今週のテーマは「救い」。暗唱聖句は「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコ1・15）。

このみ言葉は、イエスのメッセージの中心であるといわれる。マルコはイエスの説教のアウトラインを指し示し、この言葉を語ったのであろう。イエスの「わざ」も「言葉」も、「神の国」を指し示しているのである。

テキスト

14　ヨハネが捕えられた後　直訳は「ヨハネが引き渡されて後」。ヨハネの時代が終わり、イエスの時代へと至る連続性が語られる。**ガリラヤ**　イエスの宣教の中心地。**神の福音**　イエスが宣(の)べ伝えたのは「神の福音」であった。神の福音とは「神についての福音」と理解することもできるが「神から与えられた福音」と理解する立場の方が多い。**福音**　については後で述べる。

15　時は満ちた　神が定められた時が到来した、という意。すなわち旧約におけるご自身の約束が成就するために、神が定めておられた時が到来した、という意味である。**時**　とは(ギ)カイロスという言葉である。この「時」とは、神の計画の中で定められている終末の救いの「時」であり、「正しい時」「適切な時」「好ましい時」「ある定まった時」「危機の時」「最後の時」といった意味を持つ。新約聖書では、「満ちる」の他に「完了する」「成就する」「完成する」「実現する」といった意味に訳されている。イエスは「あなたがたは、（旧約）聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この（旧約）聖書は、わたしについてあかしをするものである」（ヨハネ5・39）と語られたように、旧約聖書はキリストの来臨を預言している書なのである。その旧約聖書がキリストの到来を通して実現成就したという宣言なのである。**神の国は近づいた**　「神の国」とは、人間が考えるような理想郷（ユートピア）や、空のかなたにあるといったものではなく、神の恵みの支配を指す。神が王として支配することであり、神の栄光、神の正義、神の平和、神の救いが満ちているところである。その神の恵みの支配が「近づいた」と語るのである。この「近づいた」を、到来した、という意味に解する説もある（実現された終末論）。「時が満

ちた」のであるから、神の支配も実現したというのである。またこの「近づいた」を、将来のことと理解する説もある（徹底的終末論）。しかし、ある学者は、この言葉を「イエスの到来によって、神の恵みの支配が始まった。しかし、それはもう一度イエスが来臨なさる時に完成するのである」（開始された終末論）という考えを示した。聖書にはその両面が記されている。イエスの到来によって、確かに神の国は現実のものとなった。しかし同時に、この神の国はキリストの再臨によって完成するものであって、聖書はこの両者を語っているのである。**悔い改めて福音を信ぜよ**　もう一つ、イエスが主張されたことは悔い改めと信仰である。イエスのメッセージの中心は「神の国」であり、その神の国に入るために必要な条件が「悔い改めと信仰」ということである。「悔い改め」とは、原語的な意味としては「よい方へ（あるいは悪い方へ）心を変える」という意味である。新約聖書では、人間の生きる姿勢全体の転換を表し「明らかにされた神の姿に合わせた生き方を取る」という意味として用いられる。すなわち「悔い改める」とは、生き方の一部の手直しではなく、生き方全体の方向転換を意味する。また、悔い改めの対象は、罪の結果に対しての悔い改めではなく、罪そのものに対しての悔い改めを指す（マルコ1・4）。この点、後悔とは決定的に異なる。この悔い改めが神の民とされるための消極的側面であるのに対して、「福音を信じる信仰」という側面は神の国への積極的側面であると言えよう。「福音」とは、古典ギリシャ語では、よい知らせをもってきた者に対する報酬という意味で用いられた。しかし、後にはよい知らせそのものを指して用いられている。イエスが宣べ伝えた神の国は「よい知らせ」（福音）であり、マルコはこの「よい知らせ」（福音）がイエス・キリストによってもたらされたものであり、何よりもこの福音はイエス・キリストそのものであると語るのである。そして、そのイエス・キリストを私にとっての「よき知らせ」（福音）として信じる信仰が、神の国に生きる民には必要なのである。

参考図書　A. T. Robertson「Word Pictures in the New Testament Ⅰ」（BROADMAN）、小林和夫「栄光の富Ⅱ」（日本ホーリネス教団出版局）、他

5日　礼拝メッセージ例

聖　書　マルコ1・14〜15
タイトル　悔い改めて福音を信ぜよ
暗唱聖句　時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。　マルコ1・15
目　標　悔い改めと信仰により救いをいただく

導入　（後藤　真）

イエス様はたくさんのお話をしてくださいました。たくさんの奇跡も行いました。そういったイエス様のことばや行いはとても大事な一つのことにつながっています。それはイエス様がわたしたちにいちばん願っておられることと言ってもよいでしょう。きょうはそのことをお話します。

バプテスマのヨハネ

みなさんはバプテスマのヨハネを知っていますか。バプテスマのヨハネは、荒野に現れ、らくだの毛でできた服を着て、腰に皮の帯を締めていました。食べ物はパンや魚ではなくて、いなごと野蜜でした。そんな人がいたらちょっとびっくりするかもしれません。でも、そんな見た目や食べ物よりももっとみんなが驚いたのは、ヨハネの語ることでした。

「悔い改めなさい。イスラエルの家に生まれたからと言って安心していてはいけません。罪がきよめられたしるしにバプテスマを受けなさい。」

これを聞いた人たちはドキっとしました。

「たしかにわたしはイスラエルの家に生まれたから神様に選ばれていると安心しきっていたなあ。でも本当に神様に喜ばれる生き方をしていたかなあ…そうだ悔い改めてバプテスマを受けよう」

と、そんなふうに思ってヨハネからバプテスマを受ける人がたくさん起こりました。

バプテスマのヨハネはイエス様が働きをはじめる前に、悔い改めるということを人々に教えました。そうしてイエス様の教えをみんながよく聞けるように準備をしたのです。

神の国

バプテスマのヨハネは王様に対してもこわがらずに「悔い改めなさい」と言ったので、王様のきげんを損ねて牢屋に入れられてしまいました。

ヨハネが捕まってからイエス様はガリラヤで働きをは

じめ、こう言って福音を宣べ伝えました。

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」

神の国ってどこにあるのかな、死んでから行く天国のことかな、と思った人もいるかもしれません。神の国というのは神様が王様として治める国のことです。

もし王様が自分勝手でひどい人なら、みんなが苦しみます。でもわたしたちを愛しておられ、正しいことをされる神様が王様なら、そしてみんなが神様に従うなら、みんな幸せに生きることができます。

もしわたしたちが、神様を王様としてお迎えし、神様を喜ばせて生きるなら、そこが神の国です。

悔い改めて福音を信じなさい

イエス様がわたしたちにいちばん願っていることは。「悔い改めて福音を信じなさい」ということです。そうすればわたしたちは神の国に生きることができるからです。

わたしたちは自分がいちばん、自分を王様にして生きています。そうできていなくても、そうだったらいいなあと思って生きています。お友だちよりもたくさんお菓子が欲しいなあ。教会に行くよりも動画を見ていたほうが楽しいなあ。そんなふうに自分が楽しいこと、自分が得することばかりを考えてしまいます。

でも、イエス様は、

「悔い改めて、そういう生き方はやめなさい。福音を信じて救われなさい。そして神様の喜ぶことをまず考えて神の国に生きよう」

と招いてくださいます。

ただそう言うだけではなくて、わたしたちが本当に救われて神様を喜ばせる生き方ができるように十字架にかかってくださったのです。

十字架にまでかかってくださったイエス様の愛を受けとめましょう。自分のことばかり考えてきたことを悔い改めましょう。神様をわたしたちの真ん中に、王様としてお迎えしましょう！

♪両手いっぱいの愛♪

（PW13、イン41、ホ146、新聖歌483）

聖　書　ルカ7・36〜50
テーマ　罪赦された者として

（髙橋頼男）

序論

イエスを食事に招いたパリサイ人シモンの家に、その町で罪深い女（不道徳な女、遊女）であった者が、香油の入った石膏の壺をもってきて、泣きながらイエスの後ろでみ足のそばに立ち、涙でみ足をぬらし、髪の毛でぬぐい、み足に口づけし、香油をぬりました。女の大胆な行為に対して、シモンをはじめその場にいた人々は驚きました。さらに、罪の女のそのような行為を黙って許しておられるイエスを驚きあやしんで見つめました。

一、イエスのたとえと解き明かし（40〜47）

シモンは、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思いました。しかし、イエスは女とその行為のわけをご存じでした。そしてこの女に対する見方は、シモンと全く異なっていたのです。イエスはシモンが心で考えていることを見抜いて、一つのたとえを語られました。五百デナリの借金を赦してもらった者と、50デナリを赦してもらった者とでは、どちらが余計にその人を愛するかと話されました。このたとえによりイエスは、彼女の多くの罪が赦されており、この大胆な行為は、彼女が罪の赦しをいかに感謝しているか、その喜びをいかに表しているものであるかを明らかにされました。さらに、この女と比較して、イエスを食事に招いたシモンの誠意がいかにうわべのものであり、こころがなく、愛と尊敬を逸したものであるかを、シモンが直接に主の質問に答えることを通して明らかにされました。この女とシモンのイエスに対する態度の違いはどこから来るのでしょうか。

二、罪の赦しについて（47〜50）

〈この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない〉のことばは、女の溢れる愛と、シモンの冷ややかな心との違いをみごとに言い当てています。

この女は、すでに罪の赦しを受けていました。いつ、どこで罪の赦しを確信したのでしょうか。イエスが福音を語られた時、聴衆の一人であったのか、人づてに聞いたのか、とにかく、イエスの語られた福音が、彼女に罪

の赦しを確信させたと思われます。彼女は自分がいかに罪深い者であるかを知っており、罪が赦される資格さえない者であると思いました。しかしイエスの権威ある救いの言葉を聞いた時、自分の罪が赦されたことを確信し、それが踊り上がるほどの喜び、溢れる感謝となったことでしょう。罪を深く自覚する者にだけ、イエスの言葉は、良い知らせ、喜びに満ちた福音となって届くのです。

私たちは、福音のメッセージを聞くたびに、自分の罪の深さ、また、罪の赦しの大きさ、とりわけ、十字架にその尊い命を犠牲にしてくださった御子の愛を覚え、最愛の一人子をさえ、惜しまずに犠牲としてさげてくださった父なる神の愛を思わずにはいられません。

三、大胆な愛と奉仕（37〜38）

この女が抱いた罪の赦しの恵みと感謝の思いが主への愛となり、主に対する切なる奉仕の願いにつながりました。彼女が主に近づくために、パリサイ人シモンの家に入って行った時、一斉に彼女に向けられた人々の視線は、冷ややかな、蔑（さげす）みと非難、嫌悪感さえ含むものでした。彼女はそれを全身で痛いほど感じ取ったことでしょう。その場から逃げ出してしまいたいと思ったでしょう。しかし、イエスに対する感謝と愛がそれに打ち勝ち、彼女を、一連の香油そそぎの奉仕へと駆り立てました。イエスは、この女の奉仕を喜んで受けられ、さらに、女に向かって〈あなたの罪はゆるされた〉と宣言され、さらには、〈あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい〉と語ってくださいました。

イエスは、預言者ではありません。救い主です。どんな罪をも赦し、きよめ、聖霊を注いで新しい人生に歩ませてくださる救い主です。私たちも、イエスによって罪を赦された者です。しかし、主を愛することや人々を愛することはどうでしょうか。シモンのように冷ややかな心、おざなりな奉仕、自分を誇って人々をさばくようなところがないでしょうか。神の前にへりくだりましょう。そして、主に対する熱い愛と感謝があるかどうか、奉仕がおざなりになっていないか、高ぶっていないか、ご聖霊によって探っていただきましょう。

結論

罪赦された喜びと感謝をもって、主に仕える者とならせていただきましょう。主を愛し、喜んで仕える霊を注いでいただきましょう。

研究資料

（中島啓一）

イエスへの香油注ぎに関する記事は四福音書全てにあるが、ルカだけは別の出来事だと考えられている。ヨハネ（12・1〜11）はベタニヤの三姉弟（きょうだい）の家でマリヤがイエスの足に香油を注いだとし、マルコ（14・3〜9）とマタイ（26・6〜13）はベタニヤの重い皮膚病の人シモン（三姉弟の父の名か?）の家でひとりの女がイエスの頭に香油を注いだとしている。枝葉（えだは）の違いはあるが、これら三福音書の記事は同じ出来事だとする見方が優勢である。ルカだけが別だと考えられる理由は、シモンが「パリサイ人」（36）であること、その女性が「罪の女」（37）とされていること、そして主への香油注ぎの意図が「葬りの用意」（マタイ26・12他）ではなく、罪赦（ゆる）されたことに対する感謝の応答であることなどである。

テキスト

36 食卓に着かれた　イエスは当時の作法に基づき、片肘（ひじ）をついて横たわり、足を後方にのばして席に着かれた。

37 罪の女　娼婦（しょうふ）や不道徳な女性の婉曲表現。その悪評が町中に知れ渡っていたのであろう。なお、招待されていない者が教えや施しを請うために家に入ることについて、当時の社会は寛大であった。**香油が入れてある石膏のつぼ**　容器も高価だが、中身はさらに高価であった。この女性の本来の目的は、イエスへの感謝の表現として香油を（おそらく頭に）ささげることであったのだろう。

38 泣きながら　罪を赦されたことに対する感謝の涙であろう。もちろんそこに悔改めの意味も含まれていたと見ることもできる。**イエスのうしろでその足もとに寄り**　イエスは食卓から足を壁側に向けて横たわっていたので、足もとには近づくことができたが、頭までは遠かった。**涙でイエスの足をぬらし**　意図的にというよりは、あふれ出る涙が思わずイエスの足の上に落ちたというのが真相に近いだろう。**自分の髪の毛でぬぐい**　予期せずイエスの足を涙でぬらしてしまったので、とっさに髪でぬぐったのかもしれない。**その足に接吻して**　接吻は深い敬意や感謝を表す行為であった。**香油を塗った**　香油は王の頭に注ぐにふさわしいもの。願っていた頭までは近づけなかったが、あふれ出る感謝から、彼女はその貴重な香油をイエスの足に惜しみなく注いだのである。

39　イエスがこの悪評高い女性の行為を拒まないことを

シモンは内心で批判した。**この人が預言者であるならイエスは預言者かもしれないという人々の期待に懐疑的**であったシモンの思いに反し、イエスはこの女性の状態だけでなく、シモンの心の内までも見通しておられた。

42 返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった ここに人の功績によらない神の恵みの完全なる一方性がはっきりと示されている。

44〜46 それから女の方に振り向いて、シモンに言われた シモンが非礼であったという指摘もあるが、当時の風習を鑑(かんが)みると必ずしもそうではない。とはいえ、彼はなすべきノルマを果たしたに過ぎなかった。それに対して、この女性は、罪を赦された喜びと感謝を、とどめることのできない愛のわざによって表したのである。

47 この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである その女性の愛の功績に対し赦しが与えられたという意味ではない。「愛した」は不定過去(アオリスト)（過去に起こった一回的な出来事）、「ゆるされている」は現在完了（過去の出来事の結果が現在も続いていることを表す）であり、彼女は「愛した」より前に「ゆるされて」いたのである。「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる」（新共同訳）がより分かりやすい。**少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない** 自分は神の恵みからもれるほど罪深くはないと自己過信する人には、神の恵みの真の深さは分からないという意味だろう。

48 あなたの罪はゆるされた ここも現在完了。この女性はこの時初めて赦されたのではない。イエスは、すでに彼女が得ていた赦しを、確認・保証されたのである。

49 罪をゆるすことさえするこの人 祭司は罪の赦しを宣告するだけであるが、イエスは罪の赦しを「行われた」。人々は、イエスが預言者以上の権威を持つ方であると認めざるを得なかった。

50 あなたの信仰があなたを救ったのです 救いが愛などの行為によるのではなく、恵みによることがここでも明らかに示される。**安心して行きなさい** 直訳は「平安の中へ行きなさい」。恵みを保つのではなく、恵みがその人を保つのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Noland (Word), 榊原康夫（新聖書注解 新約1）。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

12日　礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ7・36〜50
タイトル　罪赦された者として
暗唱聖句　この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。ルカ7・47
目　標　多くの罪を赦された者として、キリストを愛して生きる。

導入

（水野晶子）

まだ牛乳やヤクルトが珍しかった頃のことです。A子ちゃんはお兄ちゃんが学校から帰ってこない前に、1本しかないヤクルトを牛乳に混ぜて飲んでしまいました。お兄ちゃんが学校から帰って来て、A子ちゃんがヤクルトも牛乳も飲んだことを知ってA子ちゃんをものすごく責めました。悪いことをしたと思ったA子ちゃんはお兄ちゃんに謝りました。怒っているお兄ちゃんは赦してくれません。そこにお母さんが来て、赦そうとしないお兄ちゃんを叱りました。お兄ちゃんとA子ちゃんはお母さんを通して、欲張ってはいけないこと、赦すこと、赦されることを学びました。

多くを赦された人

聖書にたくさんのことを赦してもらった人の話があります。ある日、パリサイ人のシモンさんがイエス様を食事に招待しました。その当時の食事のマナーは、片肘をついて横たわり、足を後ろに伸ばして席に着きます。みんなが食卓に着いた時、ひとりの女の人が美しい石膏のつぼを持って入ってきました。その女の人は泣きながらイエス様の足元にひざまずきました。あまり泣いたので涙でイエス様の足がぬれてしまいました。涙でぬれた足を女の人はていねいに髪の毛でふきました。心から感謝してその足に接吻し、王様の頭に油を注ぐような思いで、香油を惜しみなく足に注ぎました。いったいなぜ、この女の人はこんなことをしたのでしょう。しかもこの女の人は、町でうわさされるような悪いことをしている人だったのです。

イエス様を食事に招いたシモンさんは心の中で、「もし、やつが神様から遣わされた人なら、この女の正体がわかるはずだ」と思いました。イエス様は、この女の人のこともシモンさんが心の中で思っていることも見抜いて、シモンさんにこんな質問をしました。「ある人が二

人の人にお金を貸しました。一人には500万円、もう一人には50万円。ところが二人ともどうしても借金を返せません。金を貸した人はたいへん思いやりのある人だったので、二人の借金を帳消しにしてやりました。この二人のうち、どちらがこの人に多く感謝し、この人を愛したでしょうか」。シモンさんは「そりゃあ、たくさんゆるしてもらった人に決まっていますよ」と答えました。

イエス様は女の人をごらんになり、言われました。「この人は涙で足を洗い、髪で拭いてくれました。あなたは私に足を洗う水さえ出してくれませんでした。この人は足に口づけして、高価な香油を注いでくれました。あなたは、礼儀としてする挨拶の口づけも、オリーブ油も注いでくれませんでしたね。だから、この人の多くの罪が赦されていることは、私に対して示した愛の大きさでわかるのです。少ししか赦されない人は、少ししか愛されないのです。」

罪の赦しと愛の応答

女の人は周りの人から後ろ指をさされ、非難され軽蔑されていることを知っていました。自分が罪深い者であることを自覚し、決して罪が赦されることはないと思っていました。しかし、どこかでイエス様の語られる福音を聞いたのです。権威あるイエス様の救いの言葉を聞いた時、自分の罪が赦されたことを確信しました。その時は、うれしくてうれしくて、躍り上がりたいほどだったことでしょう。イエス様がシモンさんの家に来ると聞いた時、なんとしてもイエス様に感謝したいと思いました。イエス様への愛のしるしが、涙で足を洗い、髪の毛で足をふき、香油を注ぐ行為となりました。イエス様は、この女の人のしたことを喜んで受け取られました。そして、「あなたの罪はゆるされた」と宣言され、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と励ましてくださいました。

私たちはシモンさんのように人の罪を指摘し、自分の罪には気付かないのではないでしょうか。今日、私も神様に喜ばれないことを言ったりしたりする罪を持っていることを認め、そのために十字架にまでかかって死んでくださったイエス様を信じて罪を赦していただきましょう。たくさん赦された喜びは、イエス様をもっと愛し、お友だちを赦し愛して、楽しく仲良く歩んでいけます。

♪両手いっぱいの愛♪（新聖歌483、ＰＷ13、ホ146他）

聖　書　ルカ8・22〜39
テーマ　レギオンからの解放

（小泉　創）

序論

イエスは「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。…すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」と、語りました（ヨハネ8・32、34）。多くの人は、自分は生きたいように生きているから自由だ、と思っていますが、それは真実ではありません。罪人は、罪の奴隷となっています。今日の聖書個所は、ガリラヤ湖の対岸での悪霊につかれた男に関する恐ろしい出来事で、私たちとはかけ離れているように思えます。しかし、これを私たちにも通じる解放の物語として読みたいのです。

一、孤独の中で

異邦人ゲラサ人の地でイエスが出会ったのは、町を離れて、裸で墓場に住む人でした。彼を突き動かしているのは、長い間彼についていた悪霊でした。男に手を焼いた町の人々によって、鎖と足かせにつながれ監視されていましたが、悪霊の力はそれすら断ち切って、男を荒野へと追いやっていたのです。異常な出来事です。彼は悪霊によって人間性も社会性も破壊されていて、その人生はどうにもできない悲惨な局面に落ち込んでいました。

しかし、イエスは〈向こう岸へ渡ろう〉と、弟子たちと舟に乗り込み、この男に会うためだけに来てくださったのです。失われた魂を捨てることなく、寄り添ってくださる主の姿がここにもあります。

これは悪霊だけのことではありません。罪もすべてを破壊します。自分自身の人生を破壊し、隣人との関係を破壊し、神との関係を破壊します。そしてイエスは、そのような「罪人を救うためにこの世にきて下さった」（Ⅰテモテ1・15）のです。

二、たくさんの悪霊

悪霊は、イエスが〈いと高き神の子〉であることを良く知っていましたが、拒みました。〈あなたはわたしとなんの係わりがあるのです。お願いです、わたしを苦しめないでください〉と。

イエスに尋ねられて、レギオンという4千から6千人のローマの軍隊の名を名乗るほど、男の中にはたくさんの悪霊が入り込んでいました。あまりにも恐ろしい話

で、これが私とどのような関係があるのだろうと不思議に思います。しかしある時、人の心はレギオンを宿せるほど複雑で広がりがあるというメッセージを聞き、納得しました。確かにどんなに親しくしている人であっても、その心のすべてを知り尽くすことはできませんし、自分自身のこともわからなくなるときがあります。誰でも心の中にさまざまな部屋をもっていて、決して人には見せたくない部屋や、自分でも認めたくない部屋があります。

イエスは、男の中の数えきれない悪霊を一つ残らず追い出されました。イエスは、わたしたちのすべてを知り尽くしてくださいます。そしてわたしたちを捕えているすべてのものから解放してくださり、自由を与えてくださるのです。

三、神をあかしする

悪霊どもは、イエスによって豚の群れの中に追いやられたあと、豚たちをがけから湖に落ちておぼれさせました。この出来事を聞いた町の人々が様子を見に来ると、そこにはあれだけ手を焼いていた人が正気に戻り、イエスの足元に着物を着てすわっているのです。それを見た人々は喜ぶよりも恐れを感じました。イエスが自分たちの想像を超える存在であることは明らかでしたが、関わることに恐れを感じ、この地を去るようにと願いました。

イエスが救い主であることがよくわかっていたのは、悪霊を追い出してもらった男だけでした。彼はイエスについていくことを望みましたが、イエスはそれをとどめて、家に帰って神がしてくださったことをあかしするようにと命じました。家から離れ、悪霊によってすべてを壊された男にとって、癒された姿で帰っていくことは葛藤があったことでしょう。けれども男にとっても、家族にとっても、町の人々にとっても、それが大切なことだったのでしょう。男は喜びをもって、イエスが自分にしてくださったことを伝え、主の御名をほめたたえたことでしょう。イエスがその地を去った後にも、神のよきおとずれは力強く伝えられたのです。

結論

イエスはあらゆる悪しき力に打ち勝ち、自由を与えてくださる救い主です。私たちも自分になされた救いのわざを、親しい人々に証しさせていただきましょう。

研究資料

（辻林和己）

ルカ8・26〜39は、主イエスが人から悪霊を追放される出来事と癒されたその人と町の人々の反応を語る個所である。並行個所は、マタイ8・28〜34、マルコ5・1〜20。

テキスト

26 ガリラヤの対岸、ゲラサ人の地 ガリラヤ湖南東に広がるデカポリス（十都市同盟）と呼ばれる地方だったと思われる（マルコ5・20参照）。

27 悪霊につかれて 悪霊は人間よりはるかに強い力を持っていることを示す個所。そのためこの人は本来の人間性を失っていた。

28 いと高き神の子イエスよ 神が、全ての被造物とは、全く異なる聖さ、高さの中に生きておられることを示す言葉であり、主イエスの神性を示す言葉。悪霊は、すぐに主イエスが神の子であることを見抜き、自らを守ろうとして、関わらないでくれと訴えている。

29 お命じになった 主イエスは悪霊さえも従わせる権威と力を持っておられる。**看視されていた 悪霊によって荒野に追いやられていた** これらは両者ともマタイ、マルコの並行個所にはない、ルカ独自の言葉と表現。

30 なんという名前か 名を知ることは相手を制することを意味している。**レギオン** 当時のローマ帝国の4千〜6千人の軍隊を意味する。このように自称するほど悪霊はこの男に入り込み、複雑多岐な形で彼の心身を縛っていた。

31 底知れぬ所 原文では〔ギ〕アビュソス。悪霊が本来、行くべき場所、悪霊の住む場所という意味。同じ言葉が、ローマ10・7、黙示録20・3でも用いられている。

32 おびただしい豚の群れ マルコ5・13によれば豚の数は約二千匹。

33 おぼれ死んでしまった 主イエスは人ひとりを救うために豚二千匹を犠牲にされた。また主は、最終的にはこれらの悪霊を本来属すべき暗黒の世界へ追いやられたと考えることもできる。

35 着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわっている この人が悪霊から解放され、本来の姿を取り戻したことを示す。28節では悪霊が恐れによって、主の「み

まえにひれ伏し」たが、ここでは、彼が救われた感謝と平安をもって主の足もとに座っている様子が語られている。

37 非常な恐怖 人々は悪霊につかれていたはずの男の変貌ぶりに驚いた。彼らは神聖な力を持っておられる主イエスに危機感、あるいは違和感のようなものを抱いた。**立ち去ってくださるようにと** 彼らにとっては人ひとりの救いよりも豚二千匹の命が惜しく、大切な家畜である豚をこれ以上、死なせたくないという気持ちも強かったであろう。

38 お供をしたいと、しきりに願ったが 地域の人々の恐れとは対照的ないやされた男の姿。彼は救われた感謝と喜びをもって主の恵みに応え、従っていきたいと強く願った。

39 家へ帰って、…語り聞かせなさい 主イエスは彼に、家族のもとに帰り、ご自身を通してなされた神の偉大なみわざとあわれみを証しするように指示された。主は一人ひとりにふさわしい使命を与えて下さる。**神があなたに** 主イエスが彼になされたことは、同時に神が主イエスを通してなされたことでもあった。主イエスが自分になしてくださったことを人々に語り聞かせることが証しであることを教えられる。彼は主の命令に従ってこの地域に残って証しをした。**町中** 当時、デカポリスはヘロデの領地でもなくユダヤ地方総督領でもなく、シリヤ州総督直轄地であり、ギリシャ文化の影響が強い地域だった。通常、主イエスは悪霊が叫ぶことも、救われた人が証しすることも禁じられた（ルカ4・35、41、8・56等）。しかし、ここではむしろ証しすることを命じておられる。それは、この地が異邦人の地であり、政治的なメシヤ待望の誤解が生じる可能性が少なかったからであろう。

前の段落（8・22～25）では、主イエスが自然界を支配されるお方であることが示され、今回の個所では霊の世界をも支配なさる全能のお方であることが示されている。

参考図書 榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社）他

19日 礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ8・26〜39
タイトル　悪霊からの解放
暗唱聖句　家へ帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい。　ルカ8・39
目　標　キリストによる解放を体験し、証しする者となる。

導入　（松浦みち子）

皆さんは、教会に行こうとするとき、「きょうは休んで友だちと遊ぼうかな。」とか「あーあ、行く気しないなぁ」と心にささやく声を聞くときはありませんか？　また、悪いことをしてはいけないと心で戦っているとき、「みんなやってるよ」「一回ぐらい、何てことないさ。だいじょうぶ、やっちゃいな。」という声にだまされることはありませんか？　聖書には、目に見えない悪魔がいて、わたしたちの心を支配しようと働いていることが書いてあります。

悪霊に取りつかれた人

ある日、イエス様がお弟子さんたちとガリラヤ湖を渡って向こう岸のゲラサ人の地に着き、陸に上がられた時のことです。その町の人で悪霊に取りつかれて長い間、墓場で暮らしている男の人に出会いました。その人は、イエス様を見ると、突然、叫び出しました。「いと高き神の子イエスよ、あなたはわたしとなんのかかわりがあるのです。お願いです。わたしを苦しめないでください。」と。この人は、悪霊に取りつかれ、服も着ないで、昼も夜も叫んだり、暴れ回るので、墓場に連れて行かれ、鎖と足かせでつながれていました。が、それを断ち切って荒野をさまよっていたのです。そんな時、イエス様に出会い、イエス様が、「この人から出ていけ。」と言われたので悪霊が叫びの声をあげたのです。イエス様は「おまえは何という名前か?」と尋ねられると「レギオンといいます。」と答えました。レギオンは、ローマの一軍団の六千人のことで、多くの悪霊がこの男に、取りついていたことをあらわす名前です。「この人から出ていけ!」と命じられた悪霊どもは、この地方で飼われていた豚の大群に乗り移ることを願い出たので、イエス様はそれをお許しになりました。すると、大群の豚に悪霊が乗り移り、豚はブーブー、鳴きながら、ダダダーッと、崖から

湖へなだれ落ちて溺れて死んでしまいました。豚飼いの人々は、ビックリして逃げ出し、町中にこの出来事を触れ回ったので、人々はこの出来事を見ようとイエス様のところにやってきました。

正気になってイエスを伝える人

人々がその出来事を見ようとやって来ると、今まで、鎖でもつないでおくことができなかった男の人が、服を着、正気になって、静かに座っています。イエス様によって悪霊を追い出していただいた人はすっかり変わり、顔つきもおだやかになり、喜びと平安に満ちた顔に変わっていました。町の人々は、この男のあまりの変わりようを信じきれずに、恐れるばかりでした。また、豚の大群をなくした豚飼いたちは、これ以上被害が及んではたいへんとばかりに、イエス様にこの地方から離れてくださるようにお願いしました。そこでイエス様は船に乗って町を出ていこうとされました。

すると、悪霊を追い出していただいた男の人が、「イエスさまー。」と追いかけてくるではありませんか。そして、「イエス様、わたしもぜひお供させてください。一緒に連れていってください。」と何度も何度もお願いしました。すると、イエス様は微笑んで、「あなたの家に帰って、神様がどんなに大きなことをしてくださったか、語り聞かせなさい。」とおっしゃいました。そこでこの人は家に帰り、家の人や、近所の人、出会う人たちに、イエス様が悪霊を追い出してくださったこと、悪霊に打ち勝つ力ある方であることを証ししました。

イエス様は、今の時代にも私たちを悪霊から守ってくださる方です。皆さんがもう少し大きくなったら、お酒やたばこなどの虜になってしまい、やめたくてもやめられないことが起きるかもしれません。また、ゲームやパチンコなどの虜になるかもしれません。悪魔の目的はただ一つ、わたしたちを神様から引き離すことです。神様は私たち人間に「永遠を思う思いを授けられました」が悪魔は、目の前のことにだけに心奪われ、神様を忘れさせて、心をメチャクチャに混乱させ、壊すことを喜ぶのです。そうして神の子から力と喜びとを奪ってしまうのです。自分の努力では決して悪魔に勝つことはできません。いつもイエス様につながり、力の源である主と共に歩んでいきましょう。

♪おおしくあれ♪（ホ106、イン77、ふ82、新聖歌486）

聖　書　ルカ8・43〜48
テーマ　長血の女の癒し

（小泉　創）

序論

ここに、できる限りのことをしてもどうにもならなかった末、イエスと出会った女の姿があります。望みを失うほどに行き詰った先に、イエスとの出会いが用意されていたのです。

一、失われた年月の末に

この女は、病名はわかりませんが、出血のとまらない婦人科の病に十二年間悩まされ、治療のために全ての財産を使い果たしていました。この女が病と格闘してきた十二年という年月は、今、イエスを呼びに来た会堂司ヤイロの愛娘の年齢と同じです。片や家庭の愛に包まれて育てられてきた女の子があり、もう一方では、病が癒（いや）されるそのことのために、同じ年月を費やしてきた女がいます。しかしどちらも死の陰にあって同じようにおびえ、イエスを必要としているのです。

この女がそっとイエスのもとに近寄ったのは、律法によって不浄とされ、町への出入りも禁じられていたからでしょう。ゆるされていなかったとしても、もうイエスのもとに行くしか道はなかったのです。この女はイエスの後ろから近づき、気づかれないようにそっと衣のふさへと手を伸ばしました。イエスを信頼すべき最後のお方として信仰の手をもってふれた女に、イエスの力は流れ込み、またたく間に癒しが与えられました。主の力は何と素晴らしいことでしょう。

二、信仰をもって触れる

次の瞬間、イエスは「わたしにさわったのは誰か」と人々に問いました。この時、イエスのもとには群衆が押し寄せてきていました。皆、自分ではありませんと言い、ペテロもこんなに人がひしめきあう中でしたから、誰が先生にぶつかったかなどわかりません、と答えました。多くの人の中で、この女だけが信仰をもってイエスに触れたのでした。そして、イエスの力はこの女だけにあらわされたのです。イエスに信仰をもって近づくことが大切です。

三、救いの宣言

女はイエスが探しているのが、自分であることがわかり恐れを感じました。群衆の中で、イエスのふさにそっとさわるくらいなら、気づかれることはないと思っていたのですが、全てをイエスはご存知でした。律法に反して行ったことも隠しきれないと悟りました。心が責められ震えながらも正直に名乗り出て、イエスの前にひれ伏すしかありませんでした。そして今まで自分が苦しんできたことと、それがたちまち癒されたことを人々の前で話したのでした。

神の語りかけに素直に応答する者は幸いです。イエスが探していたのは、無礼な行いを責めるためではありませんでした。イエスは顔と顔をあわせて、この女に必要な宣言をしてくださったのです。

〈娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい〉。

イエスはこの女の信仰を認められました。そして神の力によって病が癒されるだけではなく、救われた者として、何ら心に責めを負うことなく、神の御前に歩んで行けるようにと、人々の前で声をかけてくださったのです。これは女にとってどれほどに嬉しく、励まされる瞬間だったことでしょう。

私たちも信仰生活の中で、何かしら心に責めを感じたり、すっきりしないことを感じることがあるかもしれません。たとえば、小さなころから教会学校に通っていた子どもたちが、信仰告白をしているにも関わらず、救いの確信について悩むことがあるかもしれません。そのときには、信仰をもってイエスのもとに行ったことを確認し、イエスの救いの宣言をしっかりと受け取れるように励ましたいのです。そして、主の約束に望みをおいて、安心して信仰生活を歩んでいってもらいたいのです。

結論

信仰をもってイエスのもとに行く者を、イエスは決して悪いようにはなさいません。救いの宣言を聞き、なお安心をいただいて、主についていきましょう。

研究資料

（辻林和己）

先回の個所（ルカ8・22〜39）は、「ガリラヤの対岸、ゲラサ人の地」での出来事であったが、今回の個所はガリラヤのある町での出来事である。ここに出てくる女性のいやしの個所は会堂司ヤイロの娘の病と癒しを語る前後の記事に挟まれるような形で語られている。

テキスト

43　十二年間も　42節ではヤイロのひとり娘が「十二歳ばかりになる」と述べ、ここでこの女性が病で苦しんできた期間が同じ歳月であることを語る。「十二」年という数字は同じでも、両者のこれまで置かれてきた状況はあらゆる点で対照的である。ひとり娘はこれまで家族から愛されて育てられたであろう。しかし、その間、病の彼女は苦しみ続けてきた。そのような両者をも主イエスは救われる。**長血をわずらっていて**　この女性の病は出血の続く婦人病と考えられるが病名は断定できない。様々な治療に財産を使い果たしたが、病状は悪化する一方だった。当時、病が血に関するものなので、彼女は不浄と見なされた。（レビ15・25〜33参照）町に出入りすることも禁じられていた。このときは周りの人に顔を見られないようにして町に出て来ていたのであろう。**医者のために**　マルコ5・26には、彼女が医者によってひどく苦しめられたことが述べられているが、ルカは記していない。彼自身が医者だったからだろうか。

44　うしろから近寄って　群衆に紛れて後ろから主イエスに近寄った。**み衣のふさ**　民数記15・38の規定にある「ふさ」に由来する（マタイ23・5参照）。原文では43節と44節は、一つの文になっている。43節の「わずらう」、「使い果たす」、「なおしてもらう」の三つの動詞と44節の動詞「近寄る」はそれぞれ分詞形や不定法が用いられていて、最後の二つの動詞「さわった」、「とまった」に至る。原文のこの構造は、彼女の主イエスに「さわる（触れる）」までの長く苦しい道を思わせ、彼女のいやしを求める熱心さをより強く感じさせる。

45　わたしにさわったのは、だれか　このとき、主イエスはご自身に触れたのが誰だったのか本当はご存知だったのでは、という問い対しては、諸説がある。ある研究者は、「主がこのようにお尋ねになったのは、ご存知な

かったからではなく、この女の人が隠れていないでみんなの前に出て来られるように、そして彼女のためにも、もう汚れから解放されたことを証明してもらえるようにというご配慮だった。」と解する。**先生、…** このペテロの言葉は、「これだけ大勢の人がいますから、誰が触れたのか分かりません」という意。このとき、マルコ5・32によると、主イエスは「…さわった者を見つけようとして、見回しておられた。」誰かが救いを求めてご自分に触れたことを主イエスは敏感に感じ取られ、その人を見つけ出そうとされた。

46 力がわたしから出ていった 彼女の伸ばした手が主イエスのみ衣に触れたことではなく、彼女の信仰が主をとらえたことが神からの力を引き出す鍵であった。

47 震えながら進み出て この女性の恐れの気持ちが表れている言葉。**みまえにひれ伏し** 彼女は恐れつつも勇気を出して、群衆から一歩出て主イエスを個人的に拝した。**イエスにさわった訳と** マルコ5・28は「それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。」と彼女がみ衣に触れた理由を語る。**みんなの前で話した** 公の場で主イエスに真実を告げた。主イエスは、彼女をわざと皆の前に出させて、病気が一瞬のうちに完全にいやされて、きよめられたことを公にされた。

48 娘よ 原文では〔ギ〕スガテール。若い婦人に対する呼びかけの言葉。**あなたの信仰が** 彼女が主イエスの力を信じ、主を求め、近づき、手を伸ばして触れたことを主は評価された。**あなたを救った** 原文の動詞の原形〔ギ〕ソーゾー）は普通「救う」と訳され、病のいやし以上の全人的な救いを意味する。この救いの宣言は、彼女が前に進み出、主イエスとの個人的な交わりの後になされた。真の救いは、病のいやしではなく、信仰による魂の救いと主との一対一の交わりにより与えられる。**安心して行きなさい** 「安心」は、原文では〔ギ〕エイレネーで、ヘブル語では〔ヘ〕シャロームに該当する。これは全人的な祝福を約束した言葉。主イエスは彼女に救いの宣言をし、祝福して帰らせられた。主イエスは、私たちをも、いやし、救い、祝福して下さるお方である。

参考図書 8月19日分と同じ。

聖　書　ルカ8・43〜48
タイトル　医者から見放された人
暗唱聖句　娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。ルカ8・48
目　標　信仰によってキリストのみわざに与る者となる。

導入

夏休みもいよいよ終わりですね。どんな課題図書に挑戦しましたか？　ある小学校の学級文庫には三浦綾子の「氷点」が置いてありました。作家の三浦綾子さんは元小学校の先生でしたが、結核という病気のため十三年間もベットで寝ていました。けれども、イエス様を信じたことによって、元気になり、作家として一生を終えました。イエス様は病気を癒す力をもっておられる方なのですね。今日は、聖書の中に出てくる長い間病気で苦しんだ女の人のお話を聞きましょう。

（松浦みち子）

十二年間の病気に苦しむ女の人

この女の人は、かわいそうに十二年間も病気で苦しみました。あっちによいお医者さんがいると聞けば行き、この薬は病気にきくよ、と言われればどんなに高価な薬でも買い求めました。そうこうしているうちに貯金は底をつき、家や土地なども売って医者代にかえました。しかし、どんなにしても病気を治してもらえなかったのです。今では生きる希望も失い、ただ途方に暮れて「もうどうしたらよいかわからないわ…」と毎日なげき悲しんで暮らし、出てくるのはため息ばかりでした。

イエス様の噂を聞く

そんなある日のこと、町の中が急に騒がしくなる音を耳にしたのです。ずっと家に引きこもっていた女の人は、町の人が話している噂話に耳を傾けました。すると、「イエス様がこの町に来られたよ。」「どんな病気でも治してくださる不思議な力をもっておられるんだって！」「さあ、急いで行こうよ。」と、口々にみんなが言っています。

その時、女の人は、「わたしも行ってみよう。イエス様ならきっと、治してくださるにちがいないわ！」と、決心して町に出かけて行きました。ところが、すでにおおぜいの人がイエス様のまわりを取り囲んで近づくことはできません。でも女の人は、せめてイエス様の衣のすそにでもさわるなら癒してもらえるにちがいないと信じ

て、必死になって人々の間からそっと手を伸ばし、イエス様のうしろから衣のすそにさわりました。「あっ！」さわった瞬間、サッと痛みが過ぎ去り、病気が治ったことがわかりました。

イエス様の問いかけ

その時、イエス様は突然、「わたしにさわったのは、だれか。」と言われました。人々は口々に、自分ではないと言いました。そこで、ペテロが「先生、こんなに大勢の人がイエス様を取り囲んでひしめき合っているんですよ。だれがさわったかなんてわからないですよ。」と、言いました。しかし、イエス様は、「いや、確かにだれかがわたしにさわった。わたしから力が出ていったのを感じたのだ！」とおっしゃって、周りを見回しました。

人々の間に隠れていた女の人は、もう隠れることはできないと、震えながらおそるおそるイエス様の前に進みでて、ひれ伏しました。「イエス様、お許しください。わたしがさわりました。わたしは十二年間、病気のため苦しんでいたものです。病気がどうしたらよくなるかと、今まであれやこれやとためしてきました。でもどんなにしても治りませんでした。財産も使い果たし、今では、無一文になってしまいました。どうして生きていったらよいだろうかと、引きこもって毎日なげいていました。そんな時、イエス様のことを耳にしたのです。せめて、み衣にさわれば癒されるにちがいないと思ったのです。するとどうでしょう。十二年間も、あんなに苦しんでいた病気が、さわるとたちまち治ったのです。」と、みんなの前で、ありのままを話しました。すると、イエス様はやさしくおっしゃいました。「あなたの信仰があなたを救ったのですよ。安心して家に帰り、これからは元気にくらしなさい。」どんなに嬉しかったことでしょう。

最後に、なぜ女の人の病気はイエス様の衣にさわっただけで治ったのでしょう。イエス様は、あなたの信仰があなたを救った、と言われました。わたしたちが信じてイエス様に近づくとき、イエス様も力をあらわし、わたしたちを助けてくださるお方だということですね。

「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう」（ヤコブ4・8）。すばらしい約束のお言葉ですね。わたしたちもいつでもイエス様に信頼し祈りつつ歩んでいきましょう。

♪イエスさまにたよるぼくたちに♪（ふ12）

聖　書　ルカ10・38～42
テーマ　マルタとマリヤ

（福井文彦）

序論

イエスの一行がエルサレムに向かわれる途中、ベタニヤの村に住むマルタとマリヤの二人の姉妹の家をお訪ねになったときのことです。二人は主に対して対照的な行動をとりました。そのとき、忙しさに気をいらだて、腹を立てた姉のマルタに対して、静かにイエスは、〈無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである〉と言われました。

一、マルタとマリヤ

イエスが村へ入られると、マルタは主の一行を家に迎え入れました。しかし、この訪問は突然のことではなく、予定されていたことだと思われます。そこで今までイエスのために接待の準備をしていたマルタは、再び準備を始めたのです。

〈ところが、マルタは接待のことで忙がしくして心をとりみだし〉とありますから、姉のマルタだけが、料理などの準備をしていたように見えます。ところが、文語訳聖書には「主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思ひ給わぬか」とあります。ここに、「われを一人のこして」とありますから、イエスをお迎えするまで二人一緒に接待の準備をしていたのです。

しかし、イエスをお迎えしてマルタは台所に行き、再びイエスの接待の準備を始めたのです。一方のマリヤはイエスのお話を聴くことを選び取り、そのまま〈主の足もとにすわって、御言に聞き入って〉いました。ところが、マルタは忙しくて、接待の準備が思うようにはかどらないために気をいらだてて、マリヤとイエスの両方に腹を立てたのです。

二、無くてならぬもの

マルタは〈イエスのところにきて〉、〈主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか〉と、イエスとマリヤの二人を非難しました。自分だけ働かせて、一人イエスの足元にすわっているマリヤもマリヤだが、それを許しておられるイエスもあんまりだ、と非難しました。さらに〈わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください〉と、イエスに対して命令したのです。本当は彼女が命じられるべき存在で

あるにもかかわらずです。

そのときイエスはおっしゃいました。〈マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである〉。

マルタはいろいろともてなしのために気が落ち着かずにいました。そこでイエスは本当に必要な食事はわずかです。いや一つだけです。それはみ言葉を食べること、すなわち、み言葉に聴くことであると言われたのです。

三、み言葉に聴く幸い

それではみ言葉に聴く幸いとはどのようなものでしょうか。

①み言葉はいのちを与えます。イエスは「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ4・4）と言われました。人は神のことばによって養われ、支えられ、初めて真のいのちに生きることができます。

②み言葉によって成長します。「今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救いに入るようになるためである」（Ⅰペテロ2・2）。「それによっておい育ち」が新改訳では「それによって成長し」とあります。み言葉によってクリスチャンは成長するのです。

③み言葉に聴従するとき勝利、祝福があります。み言葉に聴従するとは、み言葉を心に貯えて、私たちの人生が心の中にあるみ言葉によって律せられて行くことです。そのとき、勝利、祝福、繁栄があります（ヨシュア1・7～8）。

④み言葉によってみこころを知ることです。マリヤは、「高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた」（ヨハネ12・3）のです。マリヤはみ言葉を聴いて、みこころを知り奉仕したのです。

結論

クリスチャンにとって最も大切なことはみ言葉に聴くことです。そのため、聖霊によって生活を律し、デボーションのときを確保することです。

研究資料

（宮澤清志）

今日は「振起日」(Rally Day)。教会学校では毎年9月の第一主日をこのように呼んでいる。もとはアメリカの教会の慣習で「教会員一同、気持ちを新たに奮い起こし(rally)、収穫の秋に備えよう」ということであろう。

さて、本日の目標が「人間にとってなくてはならないこととして、み言葉に聞く。」とある。担当者は、まず、この目標を頭に置きつつみ言葉に聞きたいものである。CS教師にとって、「み言葉に聞く」ことが、他の何にもまさって大切だからである。

また、週題「マルタとマリヤ」にあるように、この個所の主人公である「マルタとマリヤ」の人物像にも目を留めたい。マルタとマリヤの信仰の相違、またその信仰が表出した行動の相違にも、私たちは注意深く目を留めたいと思う。

また、担当者は、今回の聖書個所の他にヨハネ11・1～54と12・1～11にも同時に目を通して頂きたい。すると、マルタは「イエスがこられたと聞いて、出迎えに行った」が、マリヤは「家ですわっていた」(11・20)。またマルタは「給仕をしていた」(12・2)。見事に今回の個所と一致する。更にマリヤは「高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた」(12・3)ともある。主の足もとに座ってみ言葉に聞き入るにせよ、ナルドの壺を一撃のうちに割るにせよ、それらはマリヤにとっては主に対する愛の表れであったことに注目したい。と同時に、その行為は周囲の人々の憤激を買う非常識な行為と思われたことも付記しておきたい（ルカ10・40、ヨハネ12・5）。

テキスト

38 ある村　「ベタニヤ」のこと。マルタとマリヤの家は、このベタニヤにあった（ヨハネ11・1、18）。

39 主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた　マリヤのこの行為は、弟子としての行為である（申命記33・3、使徒22・3「ガマリエルの足もとで」が直訳）。「足もと」とは、弟子の位置であり、当時、ユダヤ教の教師（ラビ）たちは、女性が「ひざまずく」こと、つまり弟子になることを許しはしなかったのである。このことから、マリヤは自ら男性と同様に振る舞っていたのであり、このことがマルタの怒りを増幅させたとも考えられる。

マルタはこの当時の常識的な考えにとらわれていたのである。ちなみに「足」とは神による勝利者をあらわす言葉であり、ひれ伏すべき「足」であり、また教えを請うべき「足」という意味も持っている。

40 接待（ギ）ディアコニア　文字通りには「奉仕」であり、「もてなし」（新改訳、新共同訳）、「手厚き奉事」（新契約聖書）等と訳されている。ルカはこの言葉に**心をとりみだし**（ギ）ペリスパオー）を入れることによって、否定的に捉えている。またこの語は、「まわりへと引かれる」という意味を持つ言葉でもあり、マルタは多くの奉仕へと引かれていたのである。

41 心を配って（ギ）メリムナオー）　その人の実存に関わる重要な事柄が心をとりこにする、というような意味を持つ。心の分割、分散をも意味する言葉である。**思いわずらっている**（ギ）ソリュバゾー）　混乱させる、という意味。外側の動揺をあらわす言葉である。受動文であり、多くのことによって心乱されていることを、「心を配る」と重ねることによって更に強調した文章である。

42　多くの翻訳のある言葉である。**方**（ギ）メリス）　分け前、（食事の）分量、という意味の言葉。マルタは自らの義務を果たそうとするあまり、イエスの教えを傾聴することを拒んだ。イエスを囲む「持ち分」のために、せっせと立ち働いていたのである。他方マリヤは「良い方」を選択したのである。マルタはイエスに、彼の取るべき行動を指図しようとする。他方マリヤはイエスに、彼女が何をすべきかを語ってもらおうとしたのである。この差は大きい。私たちも、しばしばマルタのように、主に指図をするという大胆にも大きな罪を犯してしまうことがある。しかし、私たちがすべき事は、他のすべてを脇に置いて、イエスの教えに聞き入ることである。これがすなわち「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」（27）という新約の律法を成就すること。そして、このことは「取り去ってはならないもの」（42）なのである。

参考図書　A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」（新教出版社）。A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

2日　礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ10・38〜42
タイトル　イエス様の御声を聞こう！
暗唱聖句　無くてはならぬものは多くはない。いや一つだけである。　ルカ10・42
目　標　人間にとってなくてはならないこととして、み言葉に聞く。

導入

（飯田勝彦）

皆さんの生活は忙しいですか？　学校が終わってから、塾や習いごとがあり、帰りが遅くなることもあるでしょう。そして、あっという間に一週間、一か月、一年が経ってしまうものです。忙しいことは悪いことではありません。でも注意しないと目先の事に心が奪われて、本当に大切なことが後回しになってしまうことがあります。勉強や習い事も大切ですが、それ以上に大切なことを忘れていませんか。

イエス様の御声が聞けないマルタ

ある時、イエス様がマルタとマリヤの家を訪問されました。もし、皆さんの家をプロ野球選手やプロサッカー選手、ジャニーズの人たちが訪ねて来たらどうですか。心臓が口から飛び出るくらい緊張しながらも喜んで家を掃除するかもしれません。また、どんな話をしようか、どうしたら喜んでもらえるだろうかと一生懸命に考えて、おもてなしをするでしょう。

マルタもそうでした。マルタは、イエス様に自慢の料理でもてなそうとしたのかもしれません。台所に立って腕をふるっていました。包丁の音も何かリズミカルに聞こえてきます。

しかし、途中からマルタの様子が変わってきました。喜びに満ちていたはずのマルタが、だんだんとイライラしてきたのです。それは、マリヤが手伝いもしないでイエス様の言葉に耳を傾けていたからです。そして、マルタのイライラが最高潮に来たとき思わず、「イエス様！マリヤは、わたしだけに接待をさせています。イエス様、何ともお思いにならないのですか！　マリヤに手伝うように言ってくださいよ！」とマルタは、イエス様にそのイライラをぶつけたのです。その時、イエス様は「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている」と言われました。

実際にマルタは、イエス様をもてなすことに頭がいっ

ぱいになっていたため、イエス様が本当に喜ばれることが何だかわからなくなっていたのです。

皆さんは、忙しい生活の中で、どれほどイエス様に心を向けていますか。イエス様は、あなたが特別なことをする以上に、「わたしの声を聞いて欲しい」と願っておられます。

イエス様の御声を聞くマリヤ

思いわずらいイライラしているマルタにイエス様は、「無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ」と言われました。マリヤが選んだものは、無くてはならないものでした。皆さんの無くてはならないものは何ですか。

イエス様が言われた「無くてはならぬもの」とは、イエス様のみ言葉だったのです。聖書の中に「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とあります。私たちが生きて行くには、どうしても食べ物が必要です。しかし、もう一つ必要なものは心の食べ物であるイエス様のみ言葉なのです。

イエス様のみ言葉は、私たちの心を豊かにします。豊かな心とは、神様の愛が分かる心、神様の愛に応える心、自分を愛するように隣人を愛する心、神様の喜ばれることを進んで実行しようとする心です。

イエス様は、皆さんに「私の言葉を聞いて欲しい。そして、心に豊かな人になって欲しい」と願っておられます。

では、どのようにしてイエス様の御声を聞くことができるでしょうか。それは、聖書のみ言葉を通してです。聖書には、イエス様が私たちに伝えたいことや心の栄養がいっぱい詰まっています。マリヤはマルタと違って、イエス様の御声を聞く良い方を選びイエス様に褒められています。

まとめ

忙しい中にあっても、マリヤのように少しでもイエス様の御声を聞くことを選びましょう。一人で聖書を読むことが難しければ、お父さんやお母さん兄姉と一緒に読みましょう。または、み言葉カードを繰り返して読みましょう。子ども聖書日課も助けてくれます。

必ずイエス様が、あなたの心を豊かにしてくださいます。

♪お話しください♪（ホ81）

聖　書　ルカ18・35〜43
テーマ　盲人の癒し

（鎌野善三）

序論

ベテスダの池の病人（ヨハネ5・1〜18）が、絶望のゆえに自分のほうから主に求めなかったのと対照的に、今週登場する盲人は、主のあわれみを必死に求めている。しかし、主は同じようにこの二人を癒された。主のあわれみは、どのようなタイプの人にも注がれることが、ここで明確に示されている。ただしどちらの場合にも、主は彼らに質問しておられることが重要である。それは、彼らに「信じる」ことを教えるためであった。この盲人の一連の行動を跡づけることによって、彼の心のありさまを調べてみよう。

一、彼は尋ねた

文脈から見ると、この出来事は主の公生涯の最後の時期におこっている。エルサレムに行かれる途上で、主はエリコの町を訪れなさった。すでに主イエスのことは、多くの人々の知るところとなっていたので、主を一目見ようとする多くの群衆で道は騒然となった。この物音に驚いたのが、道ばたで物乞いをしていた一人の盲人である（マルコ10・46によれば、彼の名はバルテマイであった）。彼は、道ゆく人々に〈何事があるのかと尋ね〉ると、〈ナザレのイエスがお通りなのだと聞かされた〉。〈ナザレのイエス〉とは、「宮本村の武蔵」と同じような言い回しで、一般的な呼称だった。たとい好奇心からであれ、このように尋ねたことが、この盲人の生涯に大変化をもたらした。

現代でも、主イエスを知るきっかけは色々あるだろう。家族や友人の話、キリスト教系の学校、本、映画、テレビ、ラジオなど様々である。そのような契機がなければ、多くの人は生涯イエス・キリストを知ることがないかもしれない。これらの機会を作ることにも心を用いよう。

二、彼は叫んだ

しかし、この盲人は尋ねただけで終わらなかった。彼は、〈ナザレのイエス〉と聞いたにもかかわらず、〈ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい〉と叫んだのである。〈ダビデの子イエス〉という呼称は、旧約聖書に預言されている、ダビデの子孫として来られるメシヤを指す時に用いられる。彼は主がその方だと思って、こ

のように叫んだ。メシヤは盲人の目を開かれるという預言（イザヤ29・18、35・5等）を、彼は誰（だれ）かから聞いて知っていただろうし、主イエスが実際その奇跡をなされたという知らせも聞いていた可能性もある（ルカ7・22）。盲人ゆえに辛酸をなめてきた彼は、何としてでも見えるようになりたかったのだ。それゆえ、〈人々が彼をしかって黙らせようとしたが、彼はますます激しく叫びつづけた〉。

主のあわれみを求める者は、尋ねるだけでなく、叫び続ける。それは癒しを求める叫びだけでなく、罪の重荷からの解放を求める叫びや、愛する者の救いを求める叫びでもあろう。より聖いものとされたいという魂の叫びもあるに違いない。自分の弱さや無力さを知っているからこそ、このような熱心な叫びが生まれるのである。

三、彼は信じた

この叫びを聞かれた主は、すぐに彼にお答えになった。彼を連れて来るようにと命じ、〈わたしに何をしてほしいのか〉とたずねられたのである。聞くまでもないことをあえて聞かれたのは、彼の信仰を確認するために他ならない。彼は主が自分の目を開く力をもたれる方だと信じて、〈見えるようになることです〉と明確に答えた。だからこそ、主は〈あなたの信仰があなたを救った〉と言われたのだ。〈すると彼は、たちまち見えるようになった。そして神をあがめながらイエスに従った〉。

大きな叫びも、信じることがなければ、ただの雑音でしかない。しかし、いわしの頭をいくら信じて叫んだとしても、盲人の目は開かれることはないだろう。信じる対象が、その能力のあるお方だと受けとめて信じることが重要なのである。信じて叫び求める人に、主は必ずお答えくださる。目が見えるようになったこの人が、その後喜んで主に従ったのは、主が確かにメシヤだと信じたからであることは、容易に推測できるだろう。

結論

無学なこの盲人が、メシヤのことを詳しく理解していたとは思われない。しかし、必要最低限のことは知っていた。それは、自分が盲目であり、このお方は自分を見えるようにする力のある方だということである。つまり、自分の無能と主の全能とを知っていた。これこそ信仰の基本と言えるだろう。主イエスは、信じて叫ぶ者の声に耳を傾けてくださる、愛に満ちたお方なのである。

研究資料

（中島啓一）

この盲人の癒しの記事は、その前後の記事とも深いつながりを持っている。イエスに癒しを求めて叫びつづけたこの盲人は、不義な裁判官の譬え（1～8）で裁判を求め続けたやもめに似ているし、この盲人を黙らせようとした人たちの動機は、幼子を退けようとした弟子たち（15～17）のそれと似通っている。またこの盲人は、永遠の生命を求めてイエスのもとを訪れた金持ちの役人（18～23）と非常に対照的に描かれている。自分が霊的に盲目であることに気づいていなかったあの役人は、この世の富への執着から、永遠の生命に対する思いを引っ込めてしまった。それに対してこの盲人は、見えるようになりたいという自分の切なる願いを、自分をいやす力があると信じるイエスに対して切実に訴えた。そして周囲の妨害にも屈することなく、叫び続けたのである。この盲人の粘り強い叫びの中に信仰を見出されたイエスは、彼をお癒しになった。そしてその足でエリコの町に入り、ザアカイとお会いになるのである。この盲人は社会的弱者であった。ザアカイは社会からの疎外者であった。そんな彼らにもイエスは目をとめてくださる。その声に耳を傾け、信仰を引き出し、弟子としてくださるのである。

テキスト

35 エリコに近づかれたとき　エリコはエルサレムから約27キロ東に位置する。マルコの並行個所では「エリコから出かけられたとき」（10・46）とある。この違いを、エリコには当時の市街とは別に、古い市街があったと説明する注解者もいる。**ある盲人**　マルコは彼の名をバルテマイと明記している。エリコの門の前はエルサレムへの巡礼者の通り道であったので、物ごいに適した場所であった（貧者への施しは宗教的な善行であった）。

37 ナザレのイエスがお通りなのだ　ルカ福音書では盲人の癒しの記事はここだけである。ただし7・21に「（イエスは）多くの盲人を見えるようにしておられた」とあり、彼は盲人を癒すイエスの力を人から聞いて知っていたのだろう。

38 ダビデの子イエス　これは王として来られるメシヤ（救い主）を意味する称号である。マリヤへの受胎告知には「主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり」（1・32）とある。盲人によるこの呼びかけはイエスを救

い主と認識する一種の信仰告白と言える。**わたしをあわれんで下さい**　この叫びは、この盲人がイエスには自分を助ける力があることを信じていたことを示している。

39　彼をしかって黙らせようとした　幼子を弟子たちが退けたときのように(15)、人々はこの社会的弱者の叫びを、イエスの重要な使命の前に取るに足りないものとみなしたのであろう。また民族主義的な匂いのする「ダビデの子イエス」という叫びがローマ当局を刺激することへの恐れも、盲人を黙らせようとした一つの理由かもしれない。**彼はますます激しく叫びつづけた**　しかしこの盲人はそのような圧力を受けても屈しなかった。それどころか、その声はますます大きくなっていった。目が見えない中、自分の持つ唯一の手段である声を用いて、自分をいやす力を持つと信じるイエスとのつながりを、彼は求めつづけた。その粘り強さを、イエスは彼の信仰と呼ばれた。

41　わたしに何をしてほしいのか　この盲人が何を望んでいるかなど聞くまでもないことであった。しかしここでイエスは、彼のうちから信仰を引き出すために、あえてこう尋ねられたのである。

42　見えるようになれ　直訳は「見上げよ」。イエスがただ一言こうお命じになったとき、その言葉の権威と力とがただちにあらわれたのである。**あなたの信仰があなたを救った**　香油を塗った女(7・50)、長血の女(8・48)、いやされた10人の中の一人(17・19)にも同じ言葉が告げられた。人の側の信仰に応答して、神の力による癒しが実現されたのである。ここで言う信仰とは、「ダビデの子」という信仰告白よりもむしろ、群衆の圧力に屈しなかった彼の根気強さを直接的に指すと見る点で、多くの注解者は一致している。

43　たちまち　いやしの実現の即時性を強調する表現である。**神をあがめながらイエスに従って行った**　彼は神を賛美し、弟子となってイエスに従った。「わたしに従ってきなさい」(22)と招かれながら、悲しげにイエスの前から去ったあの金持ちの役人とは、ここでも対照的である。**人々はみな神をさんびした**　癒された本人だけでなく、そこにいるすべての人が、この癒しが神から出たものであることを認めるに至ったのである。

参考図書　8月12日分と同じ。

9日　礼拝メッセージ例

聖　書　ルカ18・35〜43
タイトル　盲人のいやし
暗唱聖句　わたしに何をしてほしいのか。
ルカ18・41
目　標　願いを明確にして祈る者となる。

導入

（和田牧子）

「いわしの頭も信心から」ということわざを聞いたことはありますか。小さな魚でも信じると、神様のように思えてくるという意味です。多くの日本の人々は、八百万（やおよろず）の神様を信じていると言われます。学問の神様、安産の神様、病気や災害から守る神様…。しかし本当は、誰に向かってどのように祈るのか、ということがとても大事です。

たずねたバルテマイ

バルテマイという目の見えない男の人がいました。働くことができないので、エリコの町の門の前に座っていました。たくさんの人が道を歩いているので、お金や食べものを恵んでもらい、それで何とか生活をしていたのです。

ある日、いつものように座っていると、急に周りがワイワイガヤガヤと騒がしくなりました。バルテマイはいったいどうしたのだろうと思い、道行く人にたずねました。

「みんな何を騒いでいるのですか。何かすごいことがおこっているのですか。」

すると人々は

「ナザレのイエスがお通りになるのだよ」

と口々に答えました。

バルテマイも、イエス様が町々村々で神様のメッセージを伝え、病気の人をいやし、目の見えない人を見えるようにされた…ということを聞いていたのでしょう。あわてて立ち上がり、道行く人々の列に加わりました。

叫んだバルテマイ

バルテマイはありったけの大きな声で

「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください！」

と叫びました。何度も何度も大声をはりあげているので

「うるさいぞ！　だまれバルテマイ」

と先に行く人たちが叱りました。けれどもバルテマイはあきらめないで、ますます激しく叫び続けました。イエ

ス様とお会いできるなんて、こんなチャンスは二度とないと思い、必死に叫びました。

するとイエス様は立ち止まって

「あの叫んでいる人を呼んできなさい」

と言われました。彼がイエス様に近づくと、イエス様は「わたしに何をしてほしいのか」と言われました。

信じたバルテマイ

イエス様はバルテマイが何を求めているのか、すでに知っておられました。聞くまでもないことでしたが、彼の信仰がどれほどのものかを確かめるために聞かれたのです。バルテマイは答えました。

「主よ、見えるようになることです」。

それを聞いたイエス様は

「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました」と言われました。

するとたちまち、バルテマイの目は見えるようになったのです。イエス様のやさしいお顔も、周りの人々の姿も、空も道もはっきりと見えました。

バルテマイはそれで「やったー」と走り去っていったでしょうか？　いいえ、「イエス様、ありがとうございます。神様感謝します」と、こんどは喜びの叫び声をあげ、イエス様に従っていったのです。それを見ていた周りの人たちも感動し、神様を賛美しました。

イエス様は彼の必死の求めに心をとめてくださり、その信仰を見て、いやしのわざをなさいました。イエス様を信じる信仰が、彼の目だけでなく、心やたましいの救いをも、もたらしたのですね。ハレルヤ！

バルテマイはそれまで、目が見えないことで、自分は何をしてもうまくいかない無力な人間だと思っていたかもしれません。でもそれだけに、よく聞こえる耳で大切なことを聞きのがさないで、覚えていました。イエス様というすばらしいお方のうわさを覚えていたのです。

そして、心の奥深くのところで、自分を救ってくださるかたはイエス様だけだと、信じていたのです。

結び

だれに向かって、どのように祈ればいいのか、皆さんもわかりましたね？　イエス様に、心から信じて必死にお祈りしましょう。必ずそのお祈りは届き、すばらしい答えが与えられますよ。

♪神さまかんしゃします♪（ホ119）

聖書 ルカ19・1〜10
テーマ ザアカイ

（水川武志）

序論

ニコデモやサマリヤの女と同様に、キリストとの出会いが、魂の回心に至った物語です。キリストは、いつも変わらぬお方です。ここでのザアカイになされた事を、主は私たちのうちにも行うことを望んでおられます。

一、ザアカイという人

主がエリコの町に入られた時のことです。エリコは世界最古の城郭都市でエルサレムに近く、門のすぐ側には収税所があります。ザアカイは取税人のかしらで、しかも金持ちであったのです。当時のユダヤ人は取税人を嫌い、犯罪人扱いにしていました。そのうえ、高額の税を徴収し、上前をはね、金持ちになった取税人のかしらであれば、市民の対応は良いはずがありません（3）。しかし、ザアカイは取税人レビ（マタイ）が救われ（5・27）、十二弟子の一人に選ばれた事を知っていたのでしょう。強い好奇心を持ってイエスにお会いしたいと願っていました。彼がなぜ取税人になったのかは不明ですが、ザアカイとは、「清い」と言う意味の名前です。幼い時から「清い・清い」と呼ばれてきた経験は、彼の潜在意識に焼き付けられ、主を求める心を呼び覚ましたのでしょう。

二、お出会いくださるキリスト

身を木陰に隠し、のぞき見るザアカイに対して、主の方から〈ザアカイよ、急いで下りてきなさい〉と語りかけてくださいました。ザアカイはこの時まで主を知らなかったのに、主は彼のすべてを知っていてくださいました。ザアカイだけでなく、私たちに対してもすべてを知っていてくださり、最高の配慮をしてくださるのです。前もっての打ち合わせもなく、〈きょう、あなたの家に泊まることにしているから〉とは、唐突なお言葉に思えます。それは、木に登ってまでも主にお会いしたいと願うザアカイの思いを知っての、主の応答です。主は、切実に求める者の思いを知ってくださるお方です。彼は社会的な地位も、富も手にしている社会的成功者の一人でした。しかし、人々からは罪人呼ばわりされる中で、心の中には満足できない寂しさがあったに違いありません。

大金持ちの役人は、永遠の命を求めて来たのに、富にこだわってキリストに従いきれませんでした（18・18〜27）。

その時、主は「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう」と言われました。人々が「それでは、だれが救われることができるのですか」と尋ねると、主は「人にはできない事も、神にはできる」と言われました。この時の答がここに表わされているのです。〈失われたものを尋ね出して救う〉御業の実現です。

三、全く変えられたザアカイ

主を喜んで迎え入れた（6）ザアカイは、全く変えられました。自分の財産の半分を貧民に施すと誓ったのです。大金持ちの役人にはできなかった事を、ザアカイは自主的に申し出ました。富に対して至上の魅力を感じていた彼であったのに。更に不正な取り立てについては、四倍にしてつぐなうと言うのです。主にお会いした事によって彼は本当に変えられました。彼は全く新しい人間に作り変えられ、新しい生き方をする者となったのです。

ザアカイは、それからも取税人のかしらとしての仕事を続け、資産家であったと伝承にあります。状況は同じでしたが、その中で彼は新しい者として、新しい生き方を貫いたのです。主に出会って頂いた恵みは、その後の彼の生涯を支え続けたのです。

主イエスは、今日も信ずる者のうちに同じことをしてくださるのです。K子さんは、教会学校の問題児でした。隣近所の人たちも彼女が来ると物がなくなると言って玄関に鍵をかけるのです。彼女が中二の時、夏のバイブルキャンプに参加しました。メッセージを聞くうちに、涙を流して罪を悔い改め、キリストを受け入れました。その日からK子さんは全く変えられました。教会学校には一番早く来て、先生の手伝いをし、一番前の座席に座ってメッセージを聞きます。公園伝道にも参加して、集まった子どもたちの世話をするようになりました。近所の人たちが、「教会はすごい。あの子を全く変えてしまったのだから」と言うようになって、教会に来る人も起こされるようになったのです。

結論

ザアカイが変えられた時、イエスは〈きょう、救がこの家にきた〉と言われました。キリストとの出会いは、ザアカイを変えただけでなく、家族や周囲の人々に祝福をもたらしました。生徒たちが真にキリストと出会えるように、教師であるあなたが、まずキリストの御前に出て、奉仕に励もうではありませんか。

研究資料

（宮澤清志）

単元のテーマは「キリストと出会った人々」である。福音書には、キリストと出会って変えられた人々の物語が数多く描かれている。彼らのキリストとの出会いの仕方もその結果も、それぞれ異なっている。しかし、彼らは皆キリストに出会って変えられた人々であった。この個所を語るにあたって、私たちとキリストとの「出会い」をもう一度考えてみたいと思う。

本日の物語は「ザアカイ」である。キリストに出会って変えられた代表的な人物の一人である。

テキスト

1　エリコ　死海に注ぐヨルダン川の河口から北西約16㎞に位置し、対岸のヨルダン方面からの交通の要衝であった。ローマ時代に関税所があった。ここでの徴税人は、ローマ政府より関税徴収を請け負っていた。

2　ザアカイ　「きよい人」「義しい人」といった意味の名前。彼の特徴を聖書からいくつか書き記しておくと、①彼は取税人のかしらであった（2）。エリコの町は地理的な交通の要衝であったうえに、ローマにとっても重要な地であり、この町の取税人のかしら、すなわち税務署長であったであろうザアカイは、莫大な財をなしたであろうと推測される。②彼は背が低かった（3）。③彼の名は、聖書中ではこの個所のみであるが、彼はその後、カイザリヤの司教（監督）になったと言われている。

4　いちじく桑　果実はいちじくのようで、葉は桑のような木。特徴として、枝が低いところから広がっていることがあげられる。従って、ザアカイは容易に登ることができた。

5　ザアカイよ　イエスはザアカイの名を知っておられた。しかも、その主導権はイエスのほうにあった。イエスご自身からザアカイの名を呼ばれたのである。**きょう**　ルカによる福音書は、この言葉を単なる時間的な意味での「きょう」として用いるのではなく、救いが時間の中にやってきたという驚くべき真実と、目の前の出来事が誰（だれ）のためのものなのかを示す意味で、非常に重要な意味を持っている言葉として用いている。**あなたの家に泊まることにしているから**　直訳は「泊まらねばならない」という非常に強い断定的な表現。ザアカイの救いのためにそうせねばならない、という神の定め、神の御旨（みむね）の表

れ。

7 人々 泥棒と同じような取税人のかしらであるザアカイの家に泊まるなどということは、ザアカイから常日頃だまされている住民たちにとっては信じられないことであったに違いない。しかし、イエスは「罪人の仲間」（7・34）なのである。

8 立って（ギ）ヒステーミ） この語は第一義的には（ある場所に）立つこと、あるいは立つという姿勢を指す言葉と理解されるが、「定める」「決心する」という意味もあわせ持つ言葉である。彼の語った次の決意の言葉と絡めると、イエスとの出会いが彼を決心させた、と見ることもできる。**主よ、わたしは誓って…** 律法によれば、賠償は、自発的な弁償の場合は、損害額に四分の一を加えた額を弁償し、また盗品がもとのままで返された場合は二倍、また意識的な強盗の場合は四倍から五倍の弁償を求めていた。ザアカイの申し出はこの律法の要求以上の弁償であって、ザアカイの悔い改めの実である。罪人の家に立ち寄り、温かい交わりをもってくださるイエスの愛は、その人に罪を自覚させ、悔い改めへと至らせる。

9 きょう、救がこの家にきた 5節参照。特にこの文では、救いが「家」に来たことに注目したい。ルカ福音書において、救いはしばしば個人にではなく「家」に来るという表現がなされる。ザアカイに家族がいたのかは分からないが、一人の人の救いは、ルカにとってはその家全体の救いにつながるということなのであろう。**アブラハムの子** ルカにとって、アブラハムの子であるということは、ユダヤ人であるという事実以外に、神の救いの計画に基づくアブラハムの子という意味がある。このアブラハムの子を何によって判定するか、ということに関しては、ユダヤ教とキリスト教の長い対立の歴史がある。ユダヤ教ではそれを血統と割礼とに見てきた。しかし、キリスト教では、この問いはアブラハムと同じ信仰とわざとに見る。**人の子** は、この隠れたユダヤ人を探し出して救うために来られたのである。

10 人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである 今回の中心聖句であり、イエスの使命の本質を指す言葉である（5・32）。そして、失われた者たちにイエスが引き起こされるのは「悔い改め」である。

参考図書 加藤常昭編訳『説教黙想集成2』「福音書」（教文館）他

聖　書　ルカ19・1〜10
タイトル　新しくされる出会い
暗唱聖句　人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。ルカ19・10
目　標　救い主キリストに出会い、キリストを心に迎え入れる。

導入　（飯田勝彦）

今、皆さんの一番の仲よしの友だちのことを心に思ってみてください。楽しくなりませんか？　これから皆さんには、たくさんの出会いがあるでしょう。その中でもどうしても出会って欲しい人がいます。イエス様です！　皆さんは、イエス様にもう出会っていますか？

あなたを知っておられるイエス様

エリコの町にザアカイという人がいました。彼の仕事は「取税人」と言って税金を取る仕事でした。皆さんが百均で物を買うとレジで108円払います。その8円が税金です。これはきちんと決められていることです。でも、当時の取税人たちは、自分が得をするように、決まっているよりも多くの税金を、人々から取りたてていました。また、仕事の都合で、ユダヤ人に嫌われていた異邦人とも関わりがありました。ですから、取税人はユダヤ人から罪人と見られ、嫌われていたのです。ですからザアカイも、町で嫌われ者だったのです。

ある時、町にイエス様が来られました。町中の人がイエス様を一目見ようと集まっていました。ザアカイもイエス様を見ようとしました。でも、彼は背が低く、しかもたくさんの人に遮られて見ることができません。でも、彼はあきらめず、木に登ってイエス様を見たのです。

するとイエス様がザアカイを見上げて「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日はあなたの家に泊まることにしている」と言われました。ザアカイにとって、イエス様とは初めての出会いでした。それなのに、イエス様はザアカイのことを知っておられたのです。不思議ですね。

イエス様は今日、あなたの名前を呼ばれます。イエス様はあなたの名前だけではなく、あなたのことをすべて知っておられるのです。

あなたの友となられるイエス様

イエス様は、みんなから嫌われているザアカイの家に

入られました。当時、ユダヤ人たちは罪人と言われるような人と付き合ってはいけませんでした。周りの人はイエス様に「彼は罪人のザアカイの家にはいって客となった」と非難したのです。でも、イエス様は、ザアカイの家に入り、彼の友だちになってくださったのです。その時、ザアカイの気持ちはどうだったでしょう。みんなから嫌われ、ずっと寂しかったザアカイは、すごく嬉しかったに違いありません。

今日、イエス様は「あなたの友だちになりたい」と言われます。

あなたを救ってくださるキリスト

ザアカイにとって、家にお客さんが来るなんて久しぶりだったかも知れません。彼は、できる限りのもてなしをしたでしょう。そして、イエス様といろいろな話をすることができたでしょう。すると突然、ザアカイは立ち上がりました。そしてイエス様を「主よ」と呼びました。これは彼がイエス様を救い主として心に迎えた瞬間でした。ザアカイは、イエス様こそ自分の罪を赦し、寂しさを慰めてくださるお方だと信じたのです。

その時からザアカイは変えられました。イエス様に「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取り立てをしていましたら、それを四倍にして返します」と言い出したのです。

ザアカイはイエス様と出会うまでは、自分に得になることばかりを考えていました。でも彼はイエス様に出会って、人から奪う者から人に与える者に変えられたのです。また、自分の罪を悔い改めました。

ザアカイの心は、以前とは違う新しい人にされたのです。

まとめ

ザアカイを新しく変えられたイエス様は、あなたの心も新しくしたいと願っておられます。そのために、「わたしをあなたの心に迎えてくれないか」と言われるのです。あなたはどうしますか？　イエス様を心に迎えてこそ「イエス様に出会った」ことになるのです。

あなたはイエス様と出会い、心新しくされたいですか？

♪すくいの主イエスに♪（ホ95）

聖書　ヨブ1・1〜22
テーマ　ヨブ

（高橋頼男）

序論

ヨブ記は旧約の中でも異彩を放っています。ヨブという義人の受けた苦難について記され、全編、友人たちとの論争やヨブの独白が長々と続きます（3章〜42章）。それらを通し、義人がなぜ苦難を受けるのかという人生の不可解、最大の疑問・難問が取り扱われているのです。1章〜2章は、この命題にかかわる問題の提起です。ヨブは神を畏れる正しい人でしたが、サタンの挑戦により、神が許された試練に会い、愛する家族、全財産を一瞬にして奪われてしまいます。しかし、ヨブは、〈主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな〉と告白し、神の前にそのくちびるで罪を犯しませんでした。

一、神が許される義人の苦難（1・1〜2・13）

義人ヨブの経験した苦難はとても理解しがたいものです。なぜ、神の前に正しく生きる者に理不尽きわまりないことが次々起こってくるのか。義なる神はなぜそれらをお許しになるのか。しかも、神は沈黙されその理由をお示しになりません。せめて、苦難の意味を少しでも知らされたなら、神を信じて耐えることも出来るかもしれません。しかし、わけの分からない苦難の連続は、まことに耐え難いのです。「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。…いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に悲しみをいだかなければならないのですか」（詩篇13・1〜2）。悪者は滅び、正しく歩む者は祝福を受けるという、旧約聖書の価値観や人生観を超えた課題が提示されているのです。

二、神の主権（1・21）

次々と襲う苦難に耐えながら、ヨブ自身が答えを出したのは、自分の人生の一切の出来事に「神の主権」を認めることでした。〈主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな〉。人生の主人公は「私」ではなく「主」です。人の生き死にを含め、人生の決定的な場面で人間はあくまでも受け身なのです。そのように告白するヨブの信仰はまことに驚くべきものです。目の前で次々に起こった悲惨で悲痛な出来事のただ中に神を認め、ひたすら生ける主を崇めているのです。ヨブの経験した試練を改めて考えて見るなら、ヨブの告白は人間中心の信

仰ではとても推し量れません。ヨブの妻のように「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい」と、とてもじゃないが、もうついていけないという人間の本心が出てしまいます。あくまで神を聖とし、神の主権にひれ伏す神中心の信仰と、神を認めると言いながら、いつも人間の思いを優先し、条件を付ける人間中心の信仰との違いが明らかです。

三、神の慈愛とあわれみ（42・10〜17）

「あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみに富んだかたであるかが、わかるはずである」（ヤコブ5・11）。神があえて許されることには、神の計り知れないみ心があり、神の真実と神の慈愛、あわれみがあることを受け止める信仰が与えられますように。

神を畏れて懸命に生きてきた姉妹が、愛するわが子を二度までも失うという、まことに辛く耐え難い悲嘆のどん底を経験しました。その様子を黙って見ていただご主人が、やさしく語ったのは「神のくださった味噌汁は飲むべきだよ」という勧めでした。神の備えられる味噌汁は、時々辛くてしょっぱくてとても飲みにくいのです。しかし、神がくださったものは、黙して飲むべきだというのです。その理由は「神のみぞ知る…」でした。

マリヤは、その胎に御子を宿すことを「お言葉どおりこの身に成りますように」とお受けした時、その心が刃で貫かれることをもお引き受けしたのでした。

十字架上で、「わが神、わが神、どうして…」と叫ばれた主も、その杯に盛られた苦みのすべてを黙って飲み干されたのです。どんな理不尽と思えることの中にも、神の深いみ心が隠されていることがあります。この地上で起こること、私たちの経験するすべてに理解と納得がいくわけではありません。しかし、すべてのことに神のみ心と神の真実、神の大いなる慈愛とあわれみがあることを信じ、信頼してお従いしていきたいものです。

結論

試練の中で神の前にひれ伏し、その主権を認めて主を告白することができますように。隠された神のみ心と慈愛とあわれみを信じ、すべてを受け止め、神を賛美することができるよう、ご聖霊の助けを祈り求めましょう。

研究資料

（金井由嗣）

ヨブ記概観

「ヨブ記」はヘブライ語正典において「諸書」に分類されており、形式・文体の上からも文学作品として扱うことが適切である。物語の発端となった事件は実際に起こった出来事であり、その出来事についての伝承が語り継がれていく中で豊かな思想と文学的表現を獲得していったとみなすのが妥当である。そのすべての過程に聖霊の豊かな働きかけを認めることが本書（及び同様の文学書）における「霊感」の信仰である。

信仰者の苦難の問題を扱った本書を理解するためにはテキストの正確な読解とあわせて解釈者自身の人生経験の深みが必要であり、それゆえに様々な人の本書への取り組みに学ぶ姿勢を持つことが大事である。

テキスト

1　ウツの地　哀歌4・21でエドムと関連づけられていることから、パレスティナより南東の土地と考えられる。**ヨブという名の人があった**　原文は「ある人がいた。ウツの地に。彼の名はヨブ」。彼はイスラエル人ではなかったが、真の神を信じる信仰者であり、主に従う「義人」だった。その点ではメルキゼデク（創世記14章）と同様である。**全く**（ヘ）ターム　**正しく**（ヘ）ヤーシャール、原義は「真っ直ぐ」）　**神を恐れ**（ヘ）ヤーラー）　**悪に遠ざか（る）**（ヘ）サール）　旧約聖書における敬虔を表す用語が四つ重ねられることで、ヨブの信仰が内面的にも実践においても模範的であったことを示している。

2　男の子七人と女の子三人…　旧約聖書において、子どもと財産はしばしば祝福のしるしと考えられた。**東の人々のうちでもっとも大いなる者　東の人々**（直訳は「東の子ら」）という言い方によって、彼がイスラエル民族に属していないことが示されている。**大いなる者**とは財産だけでなく、神に従う信仰と人格においても重んじられる人であった。

5　聖別し…燔祭をささげた　ヨブが、隠れた罪や心の中で犯した罪にすらも気を配る「全き」信仰者であったことを示す。家長であるヨブ自身が祭司の役割を果たしていることは、族長時代との類似を示している。

6　神の子たち　天使などの神に造られた霊的存在を指す。**サタン**　原義は「敵対する者」。ここでは冠詞を伴っ

た普通名詞である。本書ではサタンも神の主権に服していることが明確にされている。悪の起源を単純にサタンに帰することができないからこそ、「義人がなぜ苦しむのか」という疑問が真剣な問題となるのである。

7 地を行きめぐり… 「神の子」の一人でありながら、神の全知に挑戦しようとするサタンの不遜さ。「神のようになろうとする」傲慢こそがサタンの本質である。

9 ヨブはいたずらに神を恐れましょうか ヨブの信仰が、物質的・経済的な祝福に由来する「御利益信仰」ではないか、とのサタンの問いかけである。

12 ただ彼の身に手をつけてはならない サタンへの譲歩や妥協ではなく神の主権の範囲内で災厄が許されていることは、被害の範囲が厳密に定められていることから明らか。なお、神がサタンの提案を受け入れたのは、ヨブを試みようとするサタンとは対照的に神がヨブを信頼していたからである（グティエレス）。

16〜18 しもべたち…むすこ、娘たち サタンが奪うことを許される「財産」に奴隷や子供たちの人命が含まれることは、現代人の感覚にはなじみにくい。しかし大切な人の命が奪われたということが真の喪失であり、そこで初めて神の義と愛が問われるのである。親しい者を失うことが実際に起こる人生の現実の中で本書のメッセージを受け取るべきである。

20 起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し 悲報に接したヨブの行動と態度。上着を裂き、頭をそったのは悲嘆の表現であり、彼はけっして感情を押し殺して事態を受容したのではない。それでも彼の行動の中心は主への礼拝であり、悲嘆の中でも神を賛美し神に主権を帰すことは変わらなかった。

21 主が与え、主が取られた どれほど受け入れがたい事態であっても、ヨブはその中に神の主権を認め、神を賛美する。本書における彼の悩みと問いは、苦難においても神の主権を認めるからこそ生まれるのであり、その答えも神の主権的応答の中から与えられるのである。

参考図書 鍋谷堯爾（新聖書辞典）、ゴルディス『神と人間の書』、ジャンセン（現代聖書注解）、ヤナツイネン『主は取られる』、小畑進『ヨブ記講録』、向後昇太郎『主は与え主は取られる』、グティエレス『ヨブ記』、クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか』、鎌野直人（『ベラカ』聖書日課17年10月18日〜11月28日）。

23日　礼拝メッセージ例

聖　書　ヨブ記1・1〜22
タイトル　どんな時でも賛美しよう
暗唱聖句　主が与え、主が取られるのだ。主のみ名はほむべきかな。　ヨブ1・21
目　標　試練をも神のなさることとして受け止め、神を賛美する者となる。

導入

夏休みが終わり、二学期の生活には慣れましたか？これから秋に向かって過ごしやすい季節になりますね。季節には春夏秋冬があり、日々の生活の中には雨の日も、風の日も、暑い日もあります。そのように私たちの生活の中には、良いこともあれば嫌なこともあります。私たちには分かりませんが神様は様々な出来事を通して、私たちを愛なる神様の方へと導いて下さいます。

今日は、辛い経験の中で神様を賛美したヨブさんのお話です。

（飯田勝彦）

神をおそれるヨブさん

ヨブさんは、彼の住む地域で一番のお金持ち、セレブな人でした。たくさんの子どもにも恵まれ、羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それだけでなく多くのしもべも雇っていました。これだけの家畜ですから、もちろん広大な土地も持っていたでしょう。そんなセレブなヨブさんは、どんな人だったのでしょう。裕福で何不自由なく生活していたヨブさんですから、神様を信じて頼らなくても生活できたかもしれません。でも、ヨブさんは神様を心から信じ信頼した生活をしていました。神様をおそれ敬う人だったのです。

また、ヨブさんの財産を目当てに、多くの人たちがヨブさんに近づき、悪い生活へと誘う人もいたかもしれません。でも、ヨブさんの生活は悪いものから離れていました。それは、神様をおそれて生活していたからです。そのヨブさんの神様に対する信仰は、神様が認めるほどでした（8）。

私たちも神様をおそれ、神様に喜ばれる生活を歩みましょう。

試練に遭うヨブさん

皆さんの中に、注射が嫌いな人がいるでしょう。痛い注射は、なかなか好きになれないものです。注射の日が分かっていたらそれなりに心の準備をするかもしれませ

ん。そのように嫌で辛いことが起ると予想できていれば、心の準備もできます。でも突然、困難が襲ってくると大変ですね。幸せに暮らしていたヨブさんの生活に突然、とても辛い出来事が起こりました。大切に飼っていた牛やらくだが奪われ、また羊や羊飼いも死んでしまいました。それだけではありません。ヨブさんの愛する息子たちがみな、死んでしまったのです。何と残酷なことでしょう。

もし、皆さんがヨブさんと同じような立場であったらどうでしょう。私たちの人生にも、突然、辛く悲しい出来事が起こることがあります。

神を賛美するヨブさん

ヨブさんは、この出来事を聞くと自分の上着を裂き、頭をそりました。これは、深い悲しみを表す行為です。ですから、ヨブさんは体験した人しか分からない深い悲しみの中に立たされたのです。このような経験をしたヨブさんは神様に対して「今まであなたを第一にして来たのに、どうしこんな酷いことをするんですか！　私はもう、あなたを信じることも礼拝することもしません！」と言ったでしょうか。そう言ってもおかしくありませんでした。でも、ヨブさんは地に伏して神様への礼拝の姿勢をとり「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」と神様を賛美したのです。

何とヨブさんの口から出た言葉は、神様に対する不平不満ではなく、賛美でした。ヨブさんは神様が良いことをして下さるから信じていたわけではなかったのです。与えられる物も取られる物も、良いことも悪いこともすべて神様の御手の中にあり、神様はすべてを知っておられるという神様への絶対的な信頼があったのです。

ヨブさんの信じた神様は、良い時だけの神様ではありませんでした。どんな時でも愛し導いてくださる神様への信頼の心が、ヨブさんの口に賛美を与えたのです。

まとめ

ヨブさんが信頼し、礼拝していた神様を私たちも礼拝しています。私たちも心から神様を信頼し、神様を賛美する者にして頂きましょう。

♪主はわたしさえ♪（ホ57）

聖　書　伝道12・1〜14
テーマ　若い日に造り主を覚えよ

（金井　望）

序論

本日は伝道の書のメッセージを通して、若い日に造り主なる神を知り、このお方を畏れ敬う生涯を送ることがいかに幸いであるかを学びたい。

一、いっさいは空である

伝道の書は「ダビデの子、エルサレムの王である伝道者の言葉」（1・1）である。この王は比類無き知恵者である（1・16）。恐らくソロモンであろう（列王上3・12）。「伝道者」（コヘレト）とは「集会を召集する者」とか「集会で語る者」の意である。ソロモンは民の代表者を召集して語った（列王上8・1、12）。ただし「伝道者」は匿名である。それはソロモンの残した言葉を後の人が編集したからだろう（12・9〜14は編集後記である）。

〈空の空、いっさいは空である〉。これが本書の一貫した思想である。〈空〉と訳される原語は「息」とか「蒸気」を意味する。これが転じて、「すぐに消えてしまう実体の無いもの」という意味を持つ。本書にはこの語が37回も用いられる。

快楽、食欲、美食、性欲、妾、物欲、金銀、財宝、金銭、財産、遺産、邸宅、庭園、園芸、歌唱、事業、労働、業績、研究、知識、才能、名声、競争、権力、賄賂、不正、不条理、裁判、誓約、階級、貧困、虐待、戦争、災害、破産、病気、疲労、痛み、怠惰、夢想、饒舌、愚痴、笑い、狂気、忘却、忘恩、孤独、失望、悩み、高慢、怒り、憎しみ、妬み、呪い。〈いっさいは空である〉。

二、人はみな老いて死ぬ

人は誰も老いと死から逃れることはできない。〈造り主〉を知らぬ人の末路は〈悪しき日〉である。〈わたしにはなんの楽しみもない〉という高齢者がなんと多いことか。彼らの心は〈日〉が陰り、雨雲が立ち込める冬景色のようである。

腕は〈震え〉、背中は〈かがみ〉、歯が〈少ない〉ために噛みこなせず、〈目はかすみ〉、耳は遠くなる。胃の調子が悪くなり、目覚めが早くて〈鳥の声によって起きあがり〉、美しかった声も〈低く〉なる。〈高い〉所が恐く

なり、〈道〉を歩くのも恐ろしい。〈あめんどう〉の〈花〉のように髪は白くなり、足腰が弱って足を〈ひきずり歩き〉、肉体の〈欲望は衰え〉る。死期が近づいて、〈永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる〉。やがて体のあちこちが〈切れ〉、〈砕け〉、〈破れ〉て、死を迎える。

人間は「土のちり」にすぎない（創世記2・7）。〈ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る〉。人は「母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもその手に携え行くことができない」のである（5・15）。

三、若い日にあなたの造り主を覚えよ

無常なる世に、生きる望みはあるのか。伝道者は説く、〈あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ〉。創造主を知ることによって、初めて人は自らの存在意義と限界を悟る。神は「人の心に永遠を思う思いを授けられた」（3・11）。しかし、真理から目を背け、今しか見えず、欲望のままに生きるなら、まさに「人は獣にすぎない」（3・18）。

「若い者よ、あなたの若い時に楽しめ。…あなたの心の道に歩み、あなたの目の見るところに歩め。ただし、そのすべての事のために、神はあなたをさばかれることを知れ」（11・9）。〈神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである〉。神の法を知らずに生きるのは無免許運転に等しい。事故に遭うのも無理はない。聖書を学び、み言葉に従って生きよう。そうすれば私たちの人生は実体のあるものとなり、私たちの心は満たされる。

結論

現代のメディアは子どもたちを単純な楽観主義、利己的な快楽主義、厭世（えんせい）的な禁欲主義へと導く。そこに救いは無い。虚無感と孤独と破滅が待つだけである。子どもたちに〈あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ〉と語ろう。「神をかしこみ、み前に恐れをいだく者には幸福がある」（8・12）。

研究資料

（石田高保）

テキスト

1　あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ　この み言葉は11・7以下の続きであり、本書の結論である。特に「あなたの若い時に楽しめ…ただし、そのすべての事のために、神はあなたをさばかれることを知れ」（11・9）と呼応している。**あなたの造り主**　人の本分は、自分が神に造られた者であることを知り、その方に信頼して生きることである。そのことを折にふれて思い起こせというわけである。**わたしには何の楽しみもない**　造り主を人生の計算に入れてこなかった人は、晩年に至って生きる望みも喜びも見出せなくなる。

2　2～6節は、冬の情景や日常生活を描きながら、老人の心と体の衰えてゆく様を表している。解釈はバラエティに富んでいるが、代表的なものを挙げてみる。**日や光や、月や星の暗くならない前に**　日差しが弱まり、光が暗くなることは、生きる喜びが失せてゆく様を表している。**雨の後にまた雲が帰らないうちに**　雨模様の天気が終わらないことから、老いによる寂寞（せきばく）感の絶えない様。

3　家を守る者は震え　老化のため両腕（複数形）が震えること。**力ある人はかがみ**　腰やひざ、両足が衰えて弱くなる様。**ひきこなす女は少ない**　歯が欠けてくること。**窓からのぞく者の目はかすみ**　目がかすんでゆく様。

4　町の門は閉ざされる　耳が遠くなる様子。**ひきこなす音は低くなり**　胃の消化作用が衰える。**人は鳥の声によって起き上がり**　眠りが浅く、目覚めの早いこと。**歌の娘たちは皆、低くされる**　歌声に張り合いがなくなり、声を出す力が衰えてくる様。**高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり**　怪我をしないように高い所や出歩くことを控えるようになりがち。**あめんどうは花咲き**　あめんどうの花は白いので、白髪になる。**いなごはその身をひきずり歩き**　お年寄りが歩く様子。

6　銀のひもは切れ、金の皿は砕け　天井から吊るされているともし火皿のひもが切れることによって、部屋が真っ暗になる様を描きながら、死の暗黒を象徴している。**水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸のかたわらで砕ける**　命の綱である水がめが破れ、滑車などが井戸に落ちて壊れるように、人生の終わりを表現している。

7　ちりは、もとのように土に帰り　ちりによって造ら

れた人間の肉体が死によってちりに帰ることから、この世だけを追及する人生のむなしさを表している。**霊はこれを授けた神に帰る**　人間は死んで消滅するのではなく、神の前に立つという警告を含む（11・9、12・14）。**8　空の空、いっさいは空である**　神を抜きにしていかに華々しい人生を送ろうとも、結局は死によって無意味と化す。これが結論であれば救いがないが、13節に解決の道が示されており、神に従って歩んだ人生は神の前に永遠にものを言う（マタイ25・40）。

9　これ以下に本書の執筆の動機や事情、背景などが明らかにされている。**伝道者**（ヘコヘレトゥ）集会での語り手、説教者。ヘカーハル（人を集める／動詞）から派生した言葉で、70人訳ではギエックレジアステス（集会で話す人）というギリシヤ語に訳されている。**知恵がある**（ヘハーカーム／形容詞）これは実務的な能力としての知恵や、人間的賢さとしての知恵とは違う。神を畏れてみ言葉に従うときに与えられる洞察力や識別力である。「霊的な知恵と理解力」（コロサイ1・9）に通じる。聖書は他のいかなる知恵にもまさって、この知恵こそが真の祝福の源であることを繰り返し強調している（詩111・10、箴言9・10、エレミヤ8・9など）。**知識**（ヘダアトゥ）　これも上記の知恵と同じく、神を体験的に知る知識、あるいは倫理的、実際的な知恵のこと。

10　真実の言葉　新約的に言えば真に人を生かす「福音の真理」に通じる（ガラテヤ2・5、コロサイ1・5）。

11　知者の言葉は突き棒のようであり　羊飼が羊を棒で突きながら、正しい道へ導くことにたとえている。**よく打った釘のようなもの**　み言葉が魂に打ち込まれ、生き方がみ言葉で方向づけられる。

12　多く学べばからだが疲れる　学ぶことを否定しているのではなく、それが目的化しないように、むしろ生きる知恵を獲得し、他者を生かすことに貢献するように。「無くてならぬものは多くはない」（ルカ10・42）。

13　神を恐れ、その命令を守れ　これは「空の空」と言われる人生に意味を持たせ、生きる力をもたらす秘訣である。神を礼拝してその恵みをいただくことによってこそ、み言葉を守ることができるが、これは神と共に歩むことである。**すべての人の本分**　神から見て人間らしい生き方であり、人の創造された目的である。

参考図書　ティンデル聖書注解、新聖書注解

聖　書　伝道12・1〜14
タイトル　若い日に造り主を覚える
暗唱聖句　あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。　伝道12・2
目　標　造り主なる神を信じる生涯の幸いを知る。

導入

皆さんは、毎日幸せだなーと思うときはありますか。大好きなシュークリームを食べているとき？　温かいお風呂にゆっくりとつかるとき？　試合に勝ったとき？　幸せだなーといつも思える人はそれこそ幸せですね。それでは私たち人間にとっていちばん幸せなことはなんでしょう。そのことを今日は考えてみたいと思います。

（和田牧子）

すべては空（くう）

今日の聖書個所、伝道の書を書いた人は、イスラエルの三代目の王さまソロモンといわれています。このソロモンさんは、とてもかしこい知恵を神様から与えられました。また、大変多くのお金や財産、召しつかいをもっていました。何という幸せ。うらやましいですね。

ところがこの伝道の書には、ある言葉が何度もなんども出てくるのです。最初から読んでみるとすぐ気がつきますよ。「空」という言葉です。「そら」ではなく、「くう」とよみます。1・2に「伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である」と出てきます。伝道の書全体ではなんと37回も出てくるのです。

「空」とはどういう意味でしょう。たとえば皆さんは「空腹」になったことはありますか？　「おなかがからっぽでペコペコな」状態ですね。「空席」とは、「席があいている」状態です。そこになにもないのです。「空」のイメージわいてきましたか？

それではこの聖書個所に書かれている「空」とは、何がからっぽなのでしょうか。それは「こころ」です。心の中がからっぽで、すべてはむなしく、悲しく、さみしいのです。「えー、王さまといえば、えらい人だし、大金持ちだし、頭がよくて多くの人に尊敬されて、なんで心がむなしいの？」と思いませんか。でも、いくら勉強しても、仕事で成功しても、そのとき楽しいと思えることをやってみても、やはりむなしい、心がからっぽだといっているのです。

造り主を覚える

ところが、最後の章で、今日のみことばがでてきます。「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」。

どこまでもむなしかった人が、心がからっぽでなくなるただ一つの道を見つけました。それは、わたしたち人間を造ってくださった神様を信じるということです。

そもそもなんで私たち人間が、今生きているのか。それは神様が私たちを創造してくださったからです。私たちはお母さんのおなかの中から生まれてきましたが、お母さんが私たちを造ったわけではありませんね。男の子か、女の子か、おとなしい子か、やんちゃな子か、だれも決めることはできません。ただ神様だけが、他にはいない、特別な宝物のような存在として、私たちを造ってくださいました。

この造り主、神様を思い、どんなときも信じて生きる時に、はじめて心のむなしさはなくなります。

最高の幸せ

私たち人間は、神様に愛され、神様に造っていただいたにもかかわらず、罪をおかしてしまいました。しかし神様は私たちが滅んでしまうことを望まれず、私たちの身代わりにイエス様をこの世に送ってくださいました。イエス様は、私たちの罪を全て引き受けて、十字架にかかり、死んでくださったのです。

このことを信じるときに、むなしかった心が満足し、楽しいな、うれしいなと思えるようになります。他のどんなことにもまして、幸せだなーと思えるのです。からっぽだった心の中に、イエス様がいてくださるからです。

朝目覚めたときも、ご飯を食べるときも、学校に行っているときも、どんな時もイエス様が一緒にいてくださいます。イエス様が助けてくださるので、くじけそうでくじけず、倒れそうで倒れません。

今日のみことばには、「あなたの若い日に」とあります。そう、まさしく皆さんぐらいの子どものときに、造り主神様を信じ、イエス様と共に毎日をすごせるなら、これほど幸せなことはありません。

結び

神様を思いながら生きていると、人生の目標がはっきりとします。イエス様のすばらしさを証しすることです。毎日、造り主である神様を覚えて生きていきましょう。

♪光は勝つ♪（イッピー「YATTAA やったー！」1）

（イッピージャパンHPで楽譜ダウンロードできます）

牧羊ひろば

但馬福音教会　教会学校

●現状と前史

教会学校出席者数は週報記録によると、二〇一〇年11月21日付、男2名、女2名、計4名を以て終わり、以後「なし」と記録されます。子ども祝福式、毎日曜の礼拝を通しての子どもへの働きかけが3年間続きました。



献堂式（1972.11.23）

二〇一五年の三輪牧師着任後、教会学校の再開を祈りつつも残念ながら「なし」で来ています。しかし、毎日曜ではなくても出来る所から、子どもたちの信仰教育、福音伝道に取り組んで行きたいとの志を立てて、「子ども大会」というかたちで3年間続けて来ました。今の所、夏と冬（クリスマス）の年2回開催となっていて、ネーミングはイベント毎に変えながら、牧師、CS教師、各会メンバーが協力して行っています。

現在、但馬福音教会は創立65周年、献堂45周年となりました。50周年記念誌には、現会堂の献堂式写真（一九七二年11月23日）が掲載され、当時の主管牧師の岩田扶美二先生と共に25名ほどの子どもたちの姿があります。会堂地の校区となる五荘（ごのしょう）小学校の生徒たちが中心かと思います。記念誌に寄稿された岩田先生は「高木先生の頃に来ていた教会学校生徒が来なくなったので、特伝に便乗して子ども大会を開いたところ、大勢の子供たちが集まってきて…」と記しておられます。期せずして45年後の今、再び「子ども大会」による児童への伝道と教育が進められていることに神様の摂理を覚えます。

●聖霊の流れの中で

手元の古い「牧羊者」（一九七二年12月号）に同年９月15日兵庫教区ＣＳ教師研修会の開会礼拝にて岩田先生がヨハネ６章より「現代は肉体の食物は十分であるが、霊的食物の必要が迫られている時である、神はそれが真に必要であるならば、奇蹟を行なってでも求めに応じて下さる。あなたがたの手で食物を与えなさい」とメッセージされたことが報告されています。私がまだ２才の時すでに教会の先輩がみ言葉に立って、ＣＳに臨んでおられたことに改めて感動を覚えた次第です。昭和の高度成長期よりもさらに現代社会は物質的に豊かとなり、肉体的食物については「いかに食べないか」という節制すら求められるような時代にあって、霊的食物を大人にも子どもにも提供することが出来る教会となることを願わされます。このように、但馬福音教会に流れている霊の恵み



紙芝居・夏期学校



野菜を切ります

を踏まえて「子ども大会」のご紹介をさせていただきたいと思います。

子ども大会の目的としては、

一．地域に開かれた教会として親しみを持っていただける機会とすること。

二．クリスチャンホームの子どもが楽しく、ＣＳや礼拝出席出来るきっかけとなること。

が挙げられます。



カレーライスおいしいね

●夏休み子ども夏期学校

第１回二〇一五年８月１日（土）開催。出席者30名（男子７、女子９、大人14。午前10時から小礼拝にて、賛美、ゲーム、紙芝居、ショートメッセージ、祈祷を行いました。続いてカレーライス作りを婦人会の協力を得て行い、完成したカレーをランチタイムでいただきました。午後１時から工作タイムにて、うちわ作り、ペンシルバルーン作りを行い、その後、おやつタイムの手作りデザー



うちわ作り

トをいただきました。午後3時半から「おわりのとき」にて、礼拝で歌った曲で再び賛美し、初めての子にもおぼえられるようにしました。夏期学校全体は「礼拝に始まり、礼拝に終わる」という構成で、まことの神様を知り、そのお方に心を向ける（祈る）ことの大切さを教えるようになっています。地域の神社による祭があり、偶像礼拝に流れやすい但馬地方で暮らす子どもたちが、聖書の真理とキリストの福音について知らされ、少しずつでも回心に向かって成長する姿に励まされます。

●工夫と展望

教会について子どもたちに楽しい印象を持ってもらえるように、トンネル状のテントハウスや大きなクマのぬいぐるみを置いています。奉仕に来て下さる教会員も元気に遊ぶ子どもたちとの交流で笑顔が増えます。年毎に第2回、第3回とほぼ同じプログラムでこの「夏休み子ども夏期学校」は継続されて来ました。

単に子どもたちを集めるだけでなく、教会内外からの奉仕者、父兄、といった方々のご協力を得ている所に「神の国」の広がりを見る思いがします。

●子どもクリスマス会

第1回二〇一五年12月12日（土）開催。出席者29名（男子6、女子8、大人15）。午後1時半から小礼拝、続いてクッキー作りを行いました。焼き上がりを待つ間、クリスマスツリー飾りつけ、ゲームをして、午後3時からおやつタイムで飲み物、クッキー、チョコレートフォンデュをいただきました。午後3時半から「おわりのとき」、こ



遊ぶ子どもたち

の日何度目かの「きよしこのよる」を賛美し、祈祷を以て終わりました。帰りにクリスマスプレゼント（お菓子の詰め合わせとみ言葉カード）を受け取った子どもたちの笑顔に私たちの心も温かくなります。夏期学校と同じく年毎に、第2回、第3回と継続されています。



紙芝居・クリスマス

●時がよくても悪くても

このような「子ども大会」への出席者は回によって増減します。しかし、より多くの人数を追うというのではなく、神様から託された使命として「御言を宣べ伝えなさい。時がよくても悪くても」（Ⅱテモテ4・2）とあるように、私たちは牧師もCS教師も各会メンバーも一致協力して、福音の奉仕に励みたいと思います。



クッキー作り

●今もそこに在りや

私たちが着任後初めてのクリスマス記念礼拝、祝会が終った日曜日午後、子どもさんを数人連れた男性の方が会堂の前を通られました。挨拶に始まり話をしてみると岩田扶美二先生の時代にCSへ皆勤で出席されていたかつての生徒で、北海道から帰省されたとのことでした。ノンクリスチャンでありながら今でも「みことばカード」は持っておられ、岩田先生との年賀状が続いておられるそうです。玄関から会堂内を見て懐かしそうに「昔と同じですね」と言われました。時が過ぎ大人であり父親になったかつてのCS生徒の中に、未だ神のことばは力を持って臨んでいることを覚えて御名をあがめました。

先日夕暮れ時、会堂近くを歩いていると「オーッ」と私に呼びかける声、よく見ると子ども大会に来た男の子でした。言葉を交わし、別れた後、このようなキリストを知らない地域の子どもたちの上に救いが成就して欲しいと心から願いました。

人間的にはたとえ小さな働きであったとしても、全能の主に期待しつつ、兵庫県北、但馬の地にて忠実に「昔と同じ」福音を私たちは倦(う)まずたゆまず宣べ伝えて行きたいと思います。

「村の小さき教会　今もそこに在りや
はるか離れ住みても　汝(なれ)を忘るる日なし」
新聖歌423より

（三輪正見）



雪の日の教会

キリストの救いを知る

マルコ1・15

●サムエルと王たち

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月1日		レハベアムとヤラベアム	列王上12・1～19	箴言14・29節
8日		ヒゼキヤ	歴代志下32・9～22	同7節
15日		エステル	エステル4・1～17	同16節

●救い

7月22日		人を汚すもの	マルコ7・17～23	同23節
29日		キリストの死と復活	Ⅰコリント15・3～8	同3・4節
8月5日		悔い改めて福音を信ぜよ	マルコ1・14～15	同15節

●キリストと出会った人々

8月12日		罪赦された者として	ルカ7・36～50	同47節
19日		レギオンからの解放	ルカ8・22～39	同39節
26日		長血の女の癒し	ルカ8・43～48	同48節
9月2日	ラリー・ディ	マルタとマリヤ	ルカ10・38～42	同42節
9日		盲人の癒し	ルカ18・35～43	同41節
16日		ザアカイ	ルカ19・1～10	同10節

●詩歌①

9月23日		ヨブ	ヨブ1・1～22	同21節
30日		若い日に造り主を覚えよ	伝道12・1～14	同1節

『牧羊者』のご購読・ご利用について

＊分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円＋税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
http://cs.jccj.info/

＊ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3－3－19
電　話（078）575－5511
ＦＡＸ（078）575－6611

―おわりに―

『牧羊者』二〇一八年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

「牧羊ひろば」は但馬福音教会のCSを紹介していただきました。教師養成講座は休みました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解　石田高保師　小泉　創師　宮澤清志師
　　高橋頼男師　大頭眞一師　福井文彦師
研究資料　鎌野善三師　水川武志師　金井　望師
　　宮澤清志師　小平徳行師　辻林和己師
メッセージ例　金井由嗣師　石田高保師　中島啓一師
　　松浦みち子師　飯田勝彦師　土屋開夫師
ワーク（A）　後藤　真師　和田牧子師　水野晶子師
　　（B）　鎌野　幸師　吉田美穂師
　　（C）　山下大喜師　三輪直子師　竹崎光則師
中高科へのヒント　勝田幸恵師　野勢かほる師
　　上森恭子師　田中裕明師　勝田幸恵師
子ども聖書日課　後藤健一師　三輪正見師　石田高保師
　　田中愛子師　金田ゆり師　小野淳子師
フラッシュカード　丹羽　遥姉　松浦あん姉　佐藤由香姉
　　後藤栄子師　加藤　満師
み言葉カード・イラスト　松浦あん姉　佐藤由香姉　後藤栄子師
　　加藤　満師
ワープロ打ち込み　多田豊子師
校　正　加藤　清師　中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌
牧羊者
二〇一八年度　Ⅱ巻
二〇一八年七月一日発行
発行所　日本イエス・キリスト教団
企画監修　日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電話（〇七八）五七五―五五一一
ＦＡＸ（〇七八）五七五―六六一一
印刷所　菱三印刷株式会社
電話（〇七八）五七六―三九六一
＊日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み